雅閒録

昭和改元十二月起筆

特別
14
1919
390

176655

大正十五年

○宮廷錄事

十二月六日御生誕アラセラレシ皇孫殿下ニハ照宮成子内親王ト御命名ノ旨宮内省ヨリ發表……十四年十二月十二日

朝鮮李王殿下本日午前六時十分薨去ノ旨發表……四月二十六日

東宮殿下岡山、廣島、山口三縣下御巡啓ノ爲メ東京驛御發輿……五月十九日

聖上陛下御避暑ノ爲メ葉山ヘ行幸……八月十日

東宮殿下、同妃殿下那須御用邸ニ御避暑……八月十二日

瑞典國皇儲グスタフ・アドルフ親王殿下竝ニ同妃殿下御來朝……九月二日

聖上陛下ニハ其後一回腦貧血樣ノ御發作アリ一時御體温昇騰チ拜シタルモ程ナク御平穩ニ復サセラレタル旨宮内省ヨリ發表……九月十七日

第九十八代ノ天皇トシテ長慶天皇チ皇統譜ニ御登載ノ詔書發布……十月二十一日

天皇陛下御風氣ノ旨宮内省發表……十一月三日

聖上氣管支御併發御食氣減退、攝政宮九州大演習行啓御取止ノ旨公表……十一月十一日

聖上御容體幾分御重ク拜セラルヽ旨宮内省公表……十一月廿六日

最モ重要ナル皇室令皇室裁判令ト王公家軌範本日公布サレ二十一日ヨリ實施……十二月一日

聖上陛下御稍重ラセタマウ、御右胸ニ氣管枝肺炎ノ御症狀チ拜ス宮内省公表……十二月九日

倫敦ニ御留學中ノ秩父宮殿下ニハ聖上陛下御見舞ノ爲メ御歸朝仰セ出サル……十二月十一日

東宮同妃殿下ニハ昨十三日御見舞ノ爲メ葉山ニ行啓アラセラレ本日御歸京ノ御豫定ノ所御都合ニヨリ當分御滯在……十二月十四日

アラセラル旨東宮職發表

○内治及外交

加藤首相氣管支加答兒ニテ靜養中ノ處尿毒症併發ノ爲メ長逝、首相薨去ノ爲メ若視時首相臨時總大臣ニ親任、後臨以下内閣總辭職……一月二十八日

若視兼任總理大臣ニ對シ、内閣總理大臣兼内務大臣ノ親任式、他ノ十大臣ノ辭表ハ御却下……一月三十日

若視内閣改造、濱口藏相ヲ内相ニ、早速農相ヲ藏相ニ、壹政會總務町田忠治氏ヲ農相ニ、研究會井上匡四郎氏ヲ鐵相ニ親任……六月三日

38- 9176

176655

大藏大臣早速整爾氏胃垂下症及肺炎ノ……九月十三日
爲メ逝去
片岡商相ヲ大藏大臣ニ憲政會總務藤澤幾之輔氏ヲ商工大臣ニ親任……九月十四日
佛國駐日大使クローデル氏ハ駐米大使ニ轉任確定ノ報……十二月二日
クローデル大使ノ後任トシテド、ビリー氏駐日大使ニ決定ノ報……十二月十五日

經濟及金融

正金銀行對米爲替建値ヲ四十三弗丁度……十四年
對英建値ヲ一志九片四分ノ一ニ引上……十二月十五日
正金銀行又復對米爲替建値ヲ四十三弗半、對英ヲ一志九片半ニ引上……十二月十六日
年末金融市場平穩、本日ヘ繰越ノ日銀帳尻貸出七億五千穩、本日ヘ繰越ノ日銀換券十億六千五百七十五萬五千圓、兌換……十二月卅一日
大正十四年中ノ對外貿易輸出二十三億五百萬九千圓、輸入二十五億七千百八十萬四千圓、差引入超二億六千六百七十萬九千圓ト發表……一月七日
正金銀行對英米爲替健値引上、對米四十三弗四分ノ三、對英一志九片八分ノ五トス……一月十三日
昨年中ノ全國手形交換高ハ百三十一億一千二百四十五萬三千圓、交換所開設以來ノ最高記錄ナリ……一月十四日
正金銀行對米爲替ヲ二分ノ一引上ノ四十四弗四分ノ一、對英爲替ヲ十六分ノ三引上ノ一志九片十六分ノ十三ニ改定……一月十八日
正金銀行對英米爲替建値ヲ各四「ポイント」方引上、對米四十四弗四分ノ三……二月二日
對英一志十片十六分ノ一トス
海外高ニ爲替相場暴騰、對米四十五弗二分ノ一……二月十六日
爲替又復奔騰、對米四十六弗半……二月十八日
爲替落潮漸ク急、對米四十四弗八分ノ五……三月九日
海外ノ强調ニ對米爲替四十六弗接近……三月二十六日
爲替更ニ新高値、對米四十六弗四分ノ一、銀塊相場需用不振ノ爲メ倫敦市場ニ於ケル銀塊相場二十九片八分ノ七ニ陷落、……四月七日
大正五年以來ノ新安値ナリ
十四年度末國債總額ハ四十九億九千九百億萬圓ニシテ前年度末ニ比シ一億三千萬圓增加ノ旨大藏省ヨリ發表……四月九日
正金銀行對米爲替建値ヲ四十五弗半ニ引上、市場相場續テ騰貴、對米四十六……四月十二日
弗半
正金銀行對米爲替ヲ四十六弗丁度……四月十三日
ニ引上、市場相場亦續テ高シ
正金銀行引續キ對米爲替ヲ四十六弗半ニ引上、市場相場ハ伸惱ノ模樣……四月十四日

對米爲替愈々强カ遂ニ四十七弗出現……四月十七日
正金銀行對米爲替建値ヲ又復四十六弗四分ノ三ニ引上、市場相場四十七弗十……四月十九日
六ノ一
正金銀行對米爲替ヲ四十六弗四分ノ三……五月五日
ニ引下
本年五月末日現在全國銀行預金ハ百九億五千八百七十餘萬圓ニシテ前月ニ比シ四千九百六十餘萬圓ヲ增加シ貸出總額ハ百十八億六千三百七十九萬餘圓ニ減少……七月十二日
ノ旨大藏省ヨリ發表
正金銀行爲替建値引上、對米四分一上……七月二十日
ゲノ四十七弗
市場高ニ追隨シテ正金銀行爲替建値ヲ……八月四日
對米四十七弗ニ引上
正金銀行爲替建値引上、對米四十七弗四分ノ三、市場相場ハ更ニ躍進四十七……八月十四日
弗十六分ノ十五
爲替續イテ强調、對米四十八弗十六分……八月十八日
ノ一
正金銀行對英爲替建値ヲ十六分ノ一方……八月二十八日
引上、一志十一片八分ノ五ニ改定
正金銀行對米爲替建値ヲ四十十八日
ノ一ニ引上
倫敦銀塊相場二十八片八分ノ一トナル……九月十五日
賓ニ大正五年三月來ノ新安値ナリ……九月十六日
正金銀行爲替建値引上、對米四十八弗……九月二十一日
半、對英二志丁度
銀塊又復暴騰、二十七片臺ヲ割ル……九月三十日
日本銀行各種金利ヲ二厘方引下、明後四日ヨリ實施ノ旨發表……十月二日
倫敦ニ於テ東京市債六百萬磅成立ノ旨大藏省ヨリ發表……十月六日
銀塊遂ニ二十五片臺ヲ割リ上海圓價奔騰ノ爲メ對米爲替愈々四十九弗出現……十月十九日
正金銀行ハ對米建値ヲ四十八弗四分ノ三、對英建値ヲ二志○片八分ノ一トス……十一月四日
横濱市外債四千萬圓紐育ニ於テ成立ノ旨發表……十一月十九日
十月末ニ於ケル全國銀行ノ預金及貸出高ハ預金總額百十二億七千五百十二萬四千圓ニシテ前月ニ比シテ二千四百八十九萬一千圓ヲ增シ貸出金總額百二十三億三千四十萬八千圓ニシテ前月ニ比シ八千七百七十三萬圓ヲ增加ノ旨大藏省發表……十二月八日
十月末現在ノ國債在高ハ五十一億七千二百一十萬五千圓ニシテ前月末ニ比シ內國債三十六億九千二百三十一萬五千圓ノ增加ナリ其譯ハ內國債三十四億七千七百九十萬圓ト大藏省發表……十二月十日

○內外雜件

176655

雅間録 一

皇上の御御代に改元となり大正十五年春きさらぎ昭和の首年も正に去らんとす、本年の文壇は如何なる文学を選集の冒頭を飾るべきかを顧みるに、序文に代へて、の首篇を作る

抱業といふ国一家門の書物を、美文字通り心の外くまく表の動くまゝ、業と云ふのである。耳と筆き目と口と舌と心と、ことば吉いたのもあり、

[illegible]

の主張を陳べ表くは他人の説を駁したのもある、其体裁も秩序も倫次もなく雑然と書いたのもあれば

國勢調査ノ結果朝鮮ニ於ケル總人口一千九百五十一萬九千九百三名ト發表……十四年十二月八日
第五十一帝國議會開院式仰出サレ勅語御捧讀宮殿下行啓アラセラレ勅語御捧讀……十二月廿六日
紐育準備銀行其公定歩合ヲ三分半ヨリ四分ニ引上ノ報……一月八日
大正十四年米實收高五千九百七十一萬石ト發表、前年ニ比シ二百五十三萬餘……一月二十六日
石ノ增收ナリ
第五十一議會閉院式……三月十六日
獨逸帝銀八分ヨリ七分ニ利下ノ報……三月二十七日
紐育準備銀行四分ヨリ三分半ニ利下ノ報……四月二十三日
我國一ケ年ノ酒消費量ハ六百七十八萬六千餘石ニシテ一人當リ一斗一升六合……五月十八日ノ旨大藏省ヨリ發表
獨逸帝國銀行七分ヨリ六分半ニ利下ノ報……六月八日
印度帝銀昨十日其割引歩合ヲ五分ヨリ四分ニ引下ノ報……六月十一日
佛國「プリアン」内閣遂ニ總辭職、爲メニ佛「フラン」貨更ニ百七十九法二五ニ暴落、白耳義法百七十五法一二二陷落ノ報……六月十六日
十五年度豫算ニ於ケル國民ノ負擔總額ハ十一億四千八百萬圓ニシテ前年度ニ比シ四千三百萬圓增加ノ旨大藏省ヨリ發表……七月十二日
昨年七月一日ヨリ本年六月末日ニ至ル一年間ノ米國出超ハ二億八千七萬弗ニシテ昨年度ノ十億四千萬弗ニ比シ著シキ減少ナリ……七月十六日
佛國「ポアンカレー」氏首相級ノ人物ヲ網羅シ内閣愈々成立ノ報……七月二十四日
佛蘭西銀行昨三十日其公定割引歩合ヲ一厘一分五厘方引上ケ七分五厘ニ改定……八月一日ノ報アリ
氣温急騰、華氏九十七度五分、四十年來ノ酷暑トス……八月一日
紐育準備銀行國内的季節的關係ノ爲メ三分半ヨリ四分ニ利上ノ報……八月十三日
獨逸ニ於ケル有名ナル、世界的哲學者ルドルフ、オイケン博士昨十五日長逝……九月十六日ノ報
本年米作第一回收穫豫想五千九百五十萬石ト發表前年實收ニ比シ四厘方ノ減……十月二日
本年ノ麥收穫高ハ二千百五十九萬三千石、夏秋蕎ノ收穫豫想高ハ三千九百三十四萬餘貫ノ旨農林省ヨリ發表……十月九日
十二月二十四日ヲ以テ第五十二帝國議會召集ノ詔書發布……十一月十日
第二回米作收穫豫想五千六百八十萬石前回ヨリ四分五厘減ト發表……十一月十三日

第百銀行調査部

38- 9176

理路井然一貫した思想を持つたものもある、文は漢文
もあり和文もあり、漢和の混淆もあり、隨筆の名で
あつても隨筆らしからぬものもあり、他の書名で却
つて隨筆であるものもある、史角隨筆の範圍
は甚だ廣く、廣義に云へば更に其範圍は一層
廣く、其領域も盡然と定まることは困難である
の併し普通隨筆といふ名稱の長短を概して記する
臨到であつて、各篇の長短を概して記する
から利、事は多般に渉り、其つて、其の排列は錯綜
して居るのを隨筆といふ、故に辛の際筆を走
らせて書き出す多くを構ひず書くことゝなる
は勢ひ斯の如くなることを得ぬ。内容も

十二行

別と
ハ千篇一律で、不平の味が多く、其の強
も寄由することゝ勿論だが、或は單に遺忘に備へる
為の見聞の大略を記すもあり、或は感想の伴
ふものもあり、或は何かの研究をなしたる
資料を録するもあり、往々其人の獨創の見
識の發露もあれど、概ね不纏まりの者の多い
のが隨筆の特色である。勿論筆者の考つ
や学の強や趣味の異なる為め、内容と形式とが多く偏
史家の隨筆は史料に偏し、考証家は穿鑿に
なる傾かある。西家が西洋流、詩家が詩流、雅趣
剛一點張りであるとハ誰れも知る所であらう。
要ス一言を要するに隨筆の著者の意向に就てである。

業者に出版などの意思なく唯だ心学人の為めにするものとし、出版の意なかりしも業をなすものの差別がある、業意思より隨業をなす自然相違致かるべきつもりなる。他人に見せんとの意のなきものは自家の秘密なれども厳密所なく書散他人に対する批評なども忌憚なく書くは自然の勢なり、これに反して公刊を期するものは人を恐れしむる意思を要し文章も自然おのづから特なるを得ぬべし、もとより自己の勢なるも繰まの比隨業は後者に属し、秩序倫次を錯きて雑然たる間に生々天真流露の味を富むるのは前者に属する。例を本邦に求めば柳里恭の獨録の如きもどう思ひても刊行を期

十二行

したい方へ向くべきなり、松浦侯の大部の甲子夜話は自分が隨業の王と呼ぶべきものなるが、これは生前に刊行されなかつた隨業を作られ者の努力したものである。馬琴の玄同放言などとは自家の学識を衒ひ人為め公刊を期したの業であつたことは言ふまでもなく、曲山人の一話一言などは自然の隨業の一例なり、曲山人の一話一言は興味があるとは言ひかねるが代りに全部甲子夜話が興味のない譚ばかりなるに反して出版の下心なきものなり

自述

とうしても隨業自己を書きために一部を為すべきものの人の為めにするものとは自から品を異にする、文章に就ても唯だ自家

の為めするのハ仮字文を巻るから巧を欠くを恐れとし
るいが、爰に刊行の意志の有無を別として文章本
位に書いた随筆が古今いろいろある、古くハ徒然
草の如きハ余程の花月草紙等が著名
ある。書いてある事も趣味があるが、文章まる所
る点を用ゐてある。概して漢文家の随筆ハ文章
本位の趣がある。
さて以上あらつぽく挙げた随筆の内、其者何んがよい
かといふ優劣の論をすると立ち判断を下しかねる、
趣味本位から判定ハ出版者の作つた随筆
然らざる偏紙編をなすべきものとの区別が著
つた随筆ハ材料もよく文章も良かつたのもあり、自家

の所正不正の如偏ちなく、読者の読者を惹かしむる
用点があるから、一般に受けがよいの勿論である、有名
な随筆ハ皆な此圏範のものも幾回か版を重
ねるの、之れと反し敢て著者自から刊行の意思も
なく、唯此筆のまゝに心覚まと書き散らした随筆
を刊行すると、一概に唾棄すべき者ばかりでなく、為め
に埋没し遂に紙料と変ずるものが少くないが、
此中に棄て難いものが澤山のある、例へハ芸家の
随筆のごときハ、多くハ書門の書まとなる文章
ハ抵抗抵抗あるけれども、其の語る所の趣味
もあり又大切な意味もある。夫の世阿弥の十六部集の
如きものハ足利時代の芸苑で賛称に書かれてゐる為

ものの久しく委棄されたるのみならず、北嶺の道の為めに一道の支障を放つに至りたるを尊敬を惜まんとするの識者の恥とする所なり。工義家たるの文章は拙劣なる代りに潤色が多いから、却て空虚に弗保こと事の実相を道破したるのみ。北嶺に於て能文よりも寧ろ却つて勝れる優る所がある。世俗書と云へんに士林に長久に唾棄されたるの向きも取るべきものがあるべきものの、俗文に書いたものは市井の風俗でも人情でも潤色されたるから、俗文家が筆を弄しても却て一種の風味がある。元角美文の文い物を美化するに没するあまり事相に徴する事を忘れて事相の失がある。俗書の如き

十二行

小説に於て別種の長所もあるから、文章の巧拙を以て随筆の優劣を決することは出来ないのである。

私は何んでもいゝから真実と情味に富む随筆の方が重きを置きたいと思ふ。ウルトラ暗黒理想主義でもあるこん等の随筆を敢へ出し今の時世に用ゐたいと思ふ。斯る真実平常の随筆は自から欺かぬ記事がある。赤裸の実生活が斯る随筆に掲かれてある。著者の性格の如何や其心底の如何もこん等び把握ることが出来る。徒らに他人に知られ難い秘密も北方面の随筆に投ずれば得る。或は其人の一文中のことゝも不備を厭はず書いて

あるのは北枝の俳諧の一特徴であるから、後者が
芭蕉からヒントを得て、未熟の工夫を大成したものであ
ることもあらう、北枝の俳諧は一家の私記であ
るから日誌と共通を一するものであり、何らも蔵するを隠さず、只時の感情を真
率に書くから、そこに天真潑剌の味があると同
時に、北枝の俳諧の欠点が出て、日落ち
て暮れ、数が多い丈に北枝味も一層深いことは言ふまで
もない。
全体無味本位の俳諧は往々人を喪ふに陥し勿
れ、自己を没印して自家を拠棄することの陥り
易かるべき。芭蕉は本来俳諧に望みを
ことは言ふの俳

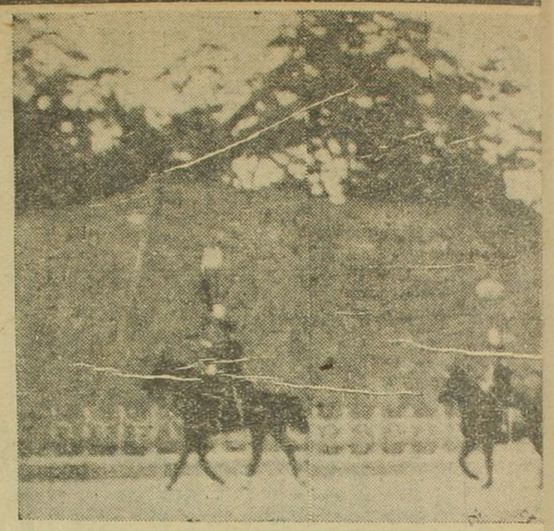
諧の望ましいのは、芭蕉自身の体験したことや
見て新しの感想や不備不纏りを創見の一
端を測り、此の新しみを、沈子百家の説は原者が見
ることも出来ることも俳諧の根本を持ちたるの、文章
の一端と為すに巧みなこと、俳しいことは言ふまで
次ぎ本体は内容外の表の表
名の人ひも市井の俗流なり芭蕉は閑山なれども
門人潤大なり後来著者の多きを俳諧を
発表するのは頗る甚しいと思ふ。

十二行

○朝見の盛儀を著布衣の典かる所と雖も而も紙衾
ミ新紙の一片を収む、新帝の新政ハ前朝未曾の事
なる如何なる時代を御現顕あるかの一端を拝する
得ん

十二行

昨朝、朝見の儀式を終らせられ鹵簿肅々として宮城二重橋を出御あらせらる



内田、犬養各同官禮遇、平沼樞府副議長、陸海軍大將、埴原全權大使、伊東巳代治伯以下各樞府顧問官、各親任貴族兩院議長、其他親任待遇、公爵從一位勳一等各親任官總代各一人、侯伯子男各爵總代各一人、朝鮮貴族總代二人、貴衆兩院議員各三人、各勲奏任官總代各一人等約三百名何れも喪章を附したる大禮服を着用して式部官の誘導に依り宮中朝見所に參集し定刻正殿に入り着席する、斯て一旦御座所に入御あらせられた天皇、皇后兩陛下には各皇族方に御對面御少憩の後式部官嚴かに鑾蹕を稱ふれば天皇陛下には伊藤式部長官、一木宮内大臣の前行にて侍從武官等御後に候し高松宮宣仁親王、閑院宮載仁親王兩殿下を始め各皇族方に供奉、皇后陛下には珍田大夫の前行にて東伏見宮妃殿下始め各高貴妃殿下供奉各女官達御後に隨ひ鳳凰の間に出でさせられ宮内親勅任官一同に拜謁仰付られ徐々として正殿へ出御左右の御座に御着あらせらる、此時一同起立して最敬禮を行ふや今上陛下には御聲いとも朗かに別項の如き優渥なる勅語を賜はり若槻首相は御前に進み恭しく奉答文を捧讀し右畢つて天皇皇后兩陛下再び鑾蹕が入御あらせらるゝや列席者一同も引續いて退下、斯て極みなき親みの中にも目出度き新帝踏祚後の朝見の盛儀は滯りなく終了を告げた

奉答文

臣禮次郎謹慎惶懼恐伏シテ言ス
大行天皇猝ニ晏駕アラセラレ臣民憂惶長痛措ク所ヲ知ラス今
叡聖文武ナル天皇陛下大統ヲ繼カセラレ效ニ尊訓ヲ下シ給ヒ
考ノ遺詞ヲ明徴ニシ大本ヲ立テ人倫ヲ明ニシ以テ皇祖皇宗ノ遺業ヲ
モノ實ニ此ニ存ス有司其レ克ク朕カ意ヲ體シ皇祖考聖ヒ皇
考ニ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡弼シ朕カ事ヲ奬順シ億兆臣
民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

公爵は不參のため德川侍從長代つて之を拜受した

◇閑院宮殿下へ

朕新ニ大統ヲ承ケ先朝ノ宏謨ヲ繼述セントス自荷甚タ重ク憂念殊ニ深シ卿宗室ノ懿親ヲ以テ兩朝ニ歷事シ勤勞是レ積ミ德望是レ隆シ其レ復タ朕カ躬ヲ匡輔シ朝ニ效セシ所ヲ以テ皇祖考聖ヒ皇考ノ遺緒ヲ失墜スル無カラシメヨ

◇西園寺公へ

朕新ニ大統ヲ承ケ先朝ノ遺業ヲ紹述セントス卿三朝ニ歷事シ屢〻夢ヲ以テ朝ニ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡輔シ朕カ事ヲ奬順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

◇若槻首相へ

朕新ニ大統ヲ承ケ先朝ノ丕績ヲ繼述セントス卿內閣ヲ總理シ正心戮力シテ朕カ志業ヲ輔翼弼成スル所アレ

陸海軍人に勅諭

新大元帥陸下は十二月二十八日の朝皇式後午前十一時宇垣陸相、財

餘日、その間の經行又は當時本紙に連載して好評を博したるもの一歩一歩變つて行く山川風物は豐富

潤川の潤を日向に養る鶏　佐保

小さき魚石間に迅し水潤る　同

の好い、ルーズな感じに思はせるほど氣の好い男だつた。若、ひょつと、山り欲へ自分を訪ねて來る

慾めになつたではないか。何と言ふ元番だ。眠れぬ。自分

昨朝、朝見の儀式を終らせられ鹵簿粛々として宮城二重橋を出御あらせらる

文武百官を召されて
朝見の盛儀を行はせらる

御聲も朗かに優渥なる勅語を賜ひ
首相奉答文を捧讀

登極の初め新天皇陛下が親臣を朝見して勅語を賜ふべき御儀祚後の朝見の盛儀は登極令の定むる所により二十八日午前十時三十分宮中正殿に於て行はせられた、此の日天皇陛下には御喪章を附したる大元帥の御正装に大勲位菊花大綬章を用ひ入江侍従長御陪乗、また皇后陛下には黒の御喪服御洋装に勲一等寶冠章を帶ばせ給ひ島津皇后宮女官長心得御陪乗、御輿を士屋侍従、國輿を牧野侍従御持、第三公式の儀馬車に召され一路かに輝く天皇旗を御先頭に一隊の近衛騎兵御警護し奉り午前九時四十分赤坂離宮御出門、順次として御警護二重橋正門より御参入遊ばさる、これより先宮中正殿は御装飾萬端整頓し御召に與つた

東郷大勲位、若槻首相、倉富枢密顧問長、奥、井上、上原各元帥、各國務大臣、山本(權兵衛伯)、高橋、清浦、後藤、山本(達雄男)、内閣大書記官長、平沼枢密顧問官、平田枢密顧問官、各顧問官、伊東巳代治伯以下各枢密顧問官、各親任官、徳川貴族院議長、其他親任待遇、公爵従一位勲一等各勲功官總代各一人、侯伯子男各爵總代各一人、朝鮮貴族總代二人、貴族院議員各三人、各廳奏任官總代各一人等三百名何れも喪章を附したる大礼服を着用して式部官の誘導に依り宮中朝見所に參集し定刻正殿に入り着席する、斯くて一旦御座所に入御あらせられた天皇、皇后陛下には各皇族方に御陪席御少憩の後式部官の先導に嚴かに鳴鞭を奉じ德川侍従長、奈良武官長以下各侍従武官等御後に候し高松宮宣仁親王、閑院宮載仁親王殿下を始め各皇族方供奉、皇后陛下には珍田大夫の前行にて東伏見宮妃殿下始め各妃殿下供奉各女官達御後に隨し御扉の間に出でさせられ宮内親任官一同に拜謝仰られ徐ろに正殿へ御左右の御座に御着あらせられる、此時一同起立して最敬礼を行ふや今上陛下には御整いとも朗かに頭項の麗き優渥なる勅語を賜はり若槻首相は御前に進み恭しく奉答文を捧讀し右終つて天皇、皇后陛下再び鳴鞭の中に入御あらせられ各員も綾々退下、斯て極みなき御光の中にも目出度き新帝踏祚後の朝見の盛儀は滞りなく終了を告げた

奉答文

臣禮次郎謹奏恐伏シテ言ス

大行天皇猝ニ崩ジ聖躬ヲ離カレ臣民憂惶哀痛ノ情ヲ知ラス今叡聖文武ナル天皇陛下大統ヲ繼カセラレ玆ニ恭謹ヲ下シ給ヒ

勅語

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ賴リ万世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先德ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カランコトヲ庶幾フ

惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ内文教ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ万邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志ヲ繼明ニ尚クス不幸中道ニシテ聖體ノ不豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ攝ス遽ニ登遐ニ遭ヒテ哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ忍ミ痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル唯兢業トシテ負荷ノ重キニ任ヘサランコトヲ之レ懼ル

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ着ケ擧國一體共存共榮ヲ之レ圖リ國本ヲ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ

今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尚ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコトは是レ朕カ軫念最モ切ナル所ニシテ丕顯ナル皇祖考ノ遺訓ヲ明徵ニシ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ實ニ此ニ存ス有司其レ克ク朕カ意ヲ體シ皇祖考暨ヒ皇考ニ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡弼シ朕カ事ヲ翼順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

閑院宮と重臣に優詔

天皇陛下には二十八日午前十一時宮中御座所に於て閑院宮載仁親王殿下並に西園寺公、若槻首相に對して左の勅語を賜はつたが西園寺

祖宗ノ遺業ヲ繼述シ國民ノ慶福ヲ增進シ國運ノ隆昌ヲ期スヘキ所ヲ昭示セサセンコトヲ宣示セサセ給ヒ世皇國民ノ福ヲ增ヘキ所ヲ昭示セサセ給ヒ世皇國運隆昌等盛運ノ至リニ勝ヘス勅ノ誠ヲ致シ以テ聖旨ニ答ヘ奉ランコトヲ誓フ

陸海軍人に勅諭

天皇陛下は十二月二十八日の朝豆式後午前十一時宇垣陸相、林海軍大臣、埴原全權大使、伊東巳代治伯以下各枢府顧問官、各親任官、徳川貴族院議長、其他親任待遇、公爵従一位勲一等各勲功官總代各一人、侯伯子男各爵總代各一人、朝鮮貴族總代二人、貴族院議員各三人、各廳奏任官總代各一人等

公爵は喪のため德川侍従長代つて之を拜受した

◇閑院宮殿下へ

朕新ニ大統ヲ承ケ先朝ノ安寧ヲ謂ヒ遠ク憂念ヲ殊ニ深シ顧ミテ自荷其ノ懿親ヲ以テ兩朝ニ歷事シ勤勞是レ積ミ復タ朕カ躬ヲ匡輔シ朕ヲシテ皇祖考ノ遺緒ヲ失墜スル無カラシメヨ

◇西園寺公へ

朕新ニ大統ヲ承ケ先朝ノ遺業ヲ紹述セント欲シ二朝ニ歷事シ勤勞ヲ司ル勤勞殊ニ顯ハル重倚最モ隆ナリ輔其レ先朝ノ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡輔シ朕カ事ヲ弼成セヨ

◇若槻首相へ

朕新ニ大統ヲ承ケ先朝ノ丕績ヲ纘述セント欲シ兩朝ヲ歷任シ正ニ協心戮力シテ其レ朕カ志ヲ輔ケ弼成スル所アレ

十二行

都新聞
(朝刊十四頁)
東京市麹町区有楽町一丁目
都新聞社
編集人兼印刷人 [illegible]

外来診察毎日午前九時至午後四時
醫學博士 大石貞夫
産科婦人科
女子泌尿器科
日本橋區中洲(ナカズ)下車
(濱町・中の橋)
電話浪花 四〇九三番

讀者と記者

號外無料配布

ヨタ號外を憎む

僅な金ではあるがくだらない號外を買つた時ほど馬鹿々々しくも小癪にさはることはない、そんなに癪にさはるなら買はなければよいと云つて仕舞へばそれまでだが、しかし買はずに居られない氣持、支配される時が絶對に無いとは云はれない、殊に今の如く號外が濫發される折柄、號外が單に昨今に限らず、號外のやうな不良な新聞が紙數を減じ

のではあるまいか。しかし、いまではあの老人も賢くなつたことであらう。もう決して訪ねては來ないであらう。二十五六日も經つたいまでは、はつきりさう思はれる。自分はもう停車場を惧れない。それは、運命を惧れない感じだ。こんな自分には、絶えず不幸が必要なのだ。

故郷へ來て、自分は到るところで訪かれた。如何して前の男とは別れたのだ。墓穴に眠るまで、この問から解放されることはないだらう。——

この中へ、あの人を呼んだことは嘗かつたか。汽車にのつて居ることがはつきり分つて居るいま。それに氣が附いたのだ。それほど自分の愛情は利己的だ。あの人を見ないで居る自分の苦しさを救ふために、あの人の事を忘れて居たのだ。あの人の神經を見逃して居たのだ。愛情とは自分の苦痛を愛することだ。

×月××日

はこの幸福を信じないのかも知れない。

あの人に對して氣をつけること

社會科學的文藝理論の展開

其方法論的研究に關する譯著など

武藤直治

〔四〕

ルナチャルスキイの著作の中で「實證美學の基礎」及同論文集「新藝術論」（茂森唯士氏譯）の二冊は共に、社會科學としての藝術科學を基礎づけるための方法論的研究書として、恐らく現代の世界に於いて最初の、若しくは高水準を示すものであらうとは思はれるが、しかもなほ、以上の意味をもつてしては不十分な點をまぬがれない。即ち社會學の一分科としての藝術科學なるものを基礎づけるためには、更により多くの自然科學的認識の成果を導入して、その上に社會科學に獨特の認識と方法とをもつて臨まねばならぬのであるが、いまだそこに至るべく可なりの距離がある。然し、ルナチャルスキイに相並んで、ゆる實證主義美學は、在來の實證派の美學の態度と方法の上に、マルクス、エンゲルスの辯證法と唯物史觀とによる研究の方法論をうけ入れて、即ち、社會科學としての美學乃至は藝術科學の最初の基礎づけをなし得たのである。

ルナチャルスキイに相並んで、トロツキーは「文學と革命」（茂森氏譯）の大部の著述その他によつて、特色ある社會科學的文藝理論を主張してゐるが、彼はルナチャルスキイに比べては實證的であり、純粹の文藝理論及び社會科學的美學の基礎づけには比較的冷淡であると思はれる。然し彼れの論理や直觀には、鋭敏な暗示的な部分が、甚だ多い。ことに、古典文學の評價や文藝の形式論については、傾聽すべきものが枚擧にいとまがないと云つてよい。

ボグダノフの論集「無產階級藝術論（藝生產氏譯）や文藝戰線誌上に連載されてゐるところのウイットフォーゲルの同樣の論文には、コムミニストの社會的實際行動と其意識的表現としての文藝の內容及び形式について、すぐれた卓見を含んでゐる。けれども、まだ純粹の文藝理論及び社會科學的美學の基礎づけ問題に關しては系統的の研究を餘りすゝめては居らないのである。以上はたゞ卑近な、わが最新鋭の譯業を主として云つたまでにすぎない。

なる著者の論說に依り繪卷の如く展開されて興趣盡きず、殊に卷中に挿入したる碧唐大峽外數十葉の寫眞は行文と共に盛々精彩を放つ

水潤ひ瀨音岐るゝ澆れ說　蘆月谷川や水潤ひて風石に鳴る　茶郎

天得寺

相手が手をさしのべる、その力にも、彼女は一層の不安だつた。

（いゝわ、あの時だけだわ……またよくうちあけたら……うちあければ許すつていつてたから……）

とあの夜、自分を襲ひ飜した情愛をもう一度厄介視さずにゐられなくなつてゐた。狂ほしく、いとしさで一杯な男は、いつまでも彼女を放さうとしなかつた。

「あなたはをかしな女だ」

「……どうして？なぜ？」

「なぜつて、本當は僕を思つてないんだ」

その言葉に射すくめられ、たわいなくよろめき、いつかまた、ところの行方を問はされて、ハッと氣附いた時には、もう彼女は家出より他はなくなつてゐた。

暗みひしがれた場面の男心は、いたゝしくも有頂天に跳返つて熱い女の抱擁にいよゝ信じきらうと焦つた。そのいたゝしさが、彼女には血みどろに見えた。それでゐて、無論彼女は、この人

○前回に於て拾遺の項未だ一卷大隈家を入れ特に家の題を考へ、前回の七月末三月末あつて元和四年の後陽成天皇の時代なり次くの四年なり

金澤稱名寺の舊記に依り侯の時代に入るものといふ、格別の時代に入るものとしてもの自分に極めて

年二月十二日の條に、天皇御宇大和元年齊

都廣成年とあり、大同年間なるべきを

何かう斯く書き癖のあるか、北の卷子に依れば

（巧者る）の言葉の級に、殊に細かれ

コト數を附す、稱名寺の雅と云ふもの也

舊鈔の

國醇會々報

本年度納会を十一月十八日田端の香取秀真氏邸に開催、会家の新書院に、田中・高村両翁　石渡敏一博士　香取主人公・篠田・河野・齋藤の幹事居流れ、まず記念寫真をとり、直ちに甚兵衛の庖刀の冴を見せた酣膳から、當夜の講話『深川八幡と其附近』は石渡博士の座談よ、宛然、肉筆の名所圖絵を繙くが如く、八幡門前の手習師匠よ通はれた少年時代から、記憶を喚起されての環境談は、又と得難き事実談で、聽者を五十年前の永代寺境内に逆戻りさせたった、三浦乾也・松本文山・井上文雄・松門みさ子の話やら、お留守居や金銀座役人の遊ぶ、松本、平清の模様、大名物持遊女屋の寮の有様手に取る如く、深川が場末と稱して、永代橋を渡つて行くことを「江戸向へ行く」と稱せしこと、さては深川言葉の蛤貝をハマグリかは、灰屋河岸を、ヘイヤガシの地言葉まで、微に入り細を穿ち、全氏ならでは出来ぬ情調であつた。

講話後、光雲翁の実地見聞談等があつて、興はますます加はり、其頃澳師町と中島町の間に「魚十」と云ふ、よしづをさしかけた旨い物屋があつて、アラ煮やアラヒが旨かつた話、ソレが「魚十」の始まりであつた、萩そばも其頃数の中にあつたソバヤで、一時間も待たせ、客を見て粉を挽くやうな家であつたとやら、何しろ深川の静寂さは、よどんだ水がわるやわに流れ、松本へ行く屋根船の櫓の音、木場の川並人足のヤレコラサノサの聲より外に、音のない、のを、寮の人々は愛したものであつたとのこと。

さて國醇会も十二月休会、來春一月は下旬開催、石渡氏の『深川』よ倣ひ、高村光雲氏の『浅草』のお話ある筈、各会員の住地物語を、毎会續けることよ決して散会。

○目今之僧侶寺院の僧侶寺院に興味を感じたことがあつたけれども、西洋社寺と同し様なことがあるくかとあつたことや、日本も中世寺院と習慣的に巡錫が行はれ且つ許されたる諸々の寺院あるとの事きゝたる遂に指を屈する時も無いが、近頃平安隆か中世さもれける社寺と社寺との関係といふ一書を著はしたのでしたんを後もも初めて多くの事実を知り得た。

北邦の古寺さ北ん くわ とも といふ言葉がある武者拾遺（中巻）に北の陸かはるこんを義経集前篇六に「箱根社領とあるのが乃ちえんを南

十二行

る。西洋でも古くアジールの言葉がある。Asyl 仏 Asyle とあるこの二字 綴のちがひ 英 Asylum とある。アジールは北の略字で公の意味で社寺の異くに定義は一定しないが、アジールに就て、ここに述んでいるものを無理と出来ることを許さない庇護保護の私を指すことは一般にある。アジールは家に権力のある所に多く行はれるを例とするが、国家の権力が確立し一切の濫用国家によつて西洋に審判せらるる所に起り得ない、私刑が禁ぜられ、罪の生ずる私に北の邦一行の変法は紀ちさるも得た

日本の上代なるアルシールの存在が認めらるゝ、保し得る傳説なるべく、朝鮮と境域を接するを所なるも其習を同じくする遺蹟を有するものあり、武藤の南端の雄龍良、雌龍良あり、山の中間に八町四方の湯き森林あり、その中の石壇を繞く、北石壇は大小の平石を以て層を重ね、基底は西面二十尺、側面十八尺、北の壇を六段とし、北に天道、法師、人宝の地と称するものあり、北書の著者は特に其地を探討したるは、実に意味あるものなり、但終に其の壇のある地の字十二山とあるを、朝鮮の蘇塗則ちアジールの壇のあるべき地名とす、又壇を以て

十二行

蘇塗の遺址とするもの、なるべし、

後漢書東夷傳

諸国邑各以一人主祭天神、号為天君、又立蘇塗、建大木以縣鈴鼓、事鬼神

朝鮮の古代ソトなる語が神聖なる不可侵意味しなることなるべし、而も雄雌の意のソトあることは三国志魏志三十の立大木縣鈴鼓事鬼神、諸亡逃至其中、皆不還之、とあるも知るべく、前に掲げし天道、法師、人天武、帝釈二年、新羅国こまんなる人也、ソトのる上代に属する

を推すべし

基づく全部なることもあるが、或は一部後金部がア

ジールと共の道主者が蕃強しも部落を家をその
比例も稀なるなる、朝鮮に蘇塗四の名があるそ
れが馬韓の一方に割據しもとが一例ひあらう
日本の戦国時代なる自治寺院ニアジールが行はれ比、
高野山のごとき大勢力の寺刹に勿論道料屋
の如き大なるものもありたる相違なれども此のアジー
ルを寺と国守とに為のる武将と戦争ともやつた
事迄もある、保し近々アジールは崩れ比、信長の如
きはどこまでも徹底的に藉しなる比自後なるもつた的
なることなる、罪あるこの寺に入んも種種なる比
らんを法しもアジールの性質を帯びたるもの
全く及ぶの方便なるもあるも、鎌倉や近利の尼

寺のアジールは最も後に残つたるもの而るえんが如
性に限らんるものあること言まもなるい

○寺院附近に商業所の出来るのは自然の趨ひあるこ
為衆参詣者の為のも記らるるを得ぬ、中世も末
巨利の附近なる所業(市)を、所謂るの前所ハえび
ある、日光所香元祢宮の門前所ならい其例ひある
保し商人が利のあるに集まるも不思議ハるいか
中世商傭が商業をるもとして、京の祇園ハ綿山崎

離宮八幡宮及び新熊野の油糟は今も安い油として神
人が商うたことは著例である。油や綿などは盛後
けて特権が與へられた。これは商人が便宜上
神社を本所と仰ぎ、その保護のもと商業を営
んだことであったろう、
勿論僧侶自らも商業を営んだ。高野聖の行商
は有名なものだ。京都などは
なかなか、何を売ったのも主として新しい薬の類であった
が、後の富山の薬の行商は清源寺と思はれる。
薬位を高ふするべき筈なのが後
まで異服も行商したし、また特許のマイスを
名を與へて申めた、マイスを乃責子である

十二行

又寺院に於ては（薬生）し且つ販賣した、其中
は天竺の酒、道後寺の猪、大福寺の納豆、昆陽寺
の蒟蒻、新義寺の扇などは有名である。十二
就て申主つのは酒の製造である。
清寺、河内の天竺の金剛寺の酒は出羽の
秀吉も之れを愛用した。
三命じたことさへある。且つ吟味料理すべきこと一山
は寺社の収入となる。ふまむもろくとん等の生産
戦国の世は寺社のみ金の多い無つたから、大切
なものは文書、証券、財産を保護、預けをして、中の
金銭は預けた、寺が相の役目をつとめた

る。軍と戦つたのみならず、遠く寺が金銀のうへにも関係し、これを大寶会と称することもあるが、たゝるくから行はれてゐる無事を願ひ寺院が貧人にも隠れもない起つたのみし、質素を寺院が貧人にも隠れもない

（三）軍用金を得るのみならず、陸奥武将が寺から金を絞り出したのみならず、又寺から金を絞ればかりでなく、東大寺の廣長十四丈の盧舎那佛の建立に、こんハ法輪院が金を寺が銀の鐵の米会を建てたのみならず、紅花を染めて内宴の料とのみ化したのみならず、

延暦寺が寶人を多数の任官を京都とやつたのみならず、

（三）寺院の高貴ハ寺院の神佛の威力を利用する契約をなすことやら政府

が割合に保護をしたのみならず、時の寺院ハ降伏したのみならず、寺院が為めに社会の便利を得たのである。

右の事業が早く中世に起つて、寺院いえんを助長するに大いに力があつたのみならず、寺院の多くの領地を取扱つたのみならず、陽の領地を収納をなしたのみならず、

（三）寺院の領地ハ寺院の高貴ハ寺院の神佛の威力を利用する契約をなすことやら政府

が割合に保護をしたのみならず、時の寺院ハ降伏したのみならず、寺院が為めに社会の便利を得たのである。

右の事業が早く中世に起つて、寺院いえんを助長するに大いに力があつたのみならず、寺院の多くの領地を取扱つたのみならず、陽の領地を収納をなしたのみならず、

（三）寺院の領地ハ寺院の高貴ハ寺院の神佛の威力を利用する契約をなすことやら政府

ちゝ、ちゝ、ちゝ、

のである。

関所（関）の設定は（関）り税を納めしむることは寺院が収入をとる一法であるが、多関係から無論関所を設ける以、淀川筋の関所があることである。人員用しうる位置の地から実である。南時交通と往来の不便が多かつた頃、上に関所八幡の数多く見る（関）毎に必ずしも金を要することとなつたのの不便いと云ふこと為ひある。関所の大名や豪族の設けたものが別にあることを忘れてはならぬ。

十二行

往来物が民衆教育の大切な材料であつたことは言ふまでもないが、それが意味ある出来もの、江戸時代に数多く往来物の出来たのも諸藩を中心往来に著しくある。往来物は元来武村記者侍士が執筆し集めた往来の数千二三百もあるとか、古くいまの用語の中に実物の失せたものもあるとか、驚き出来る程多くの物語がある。今新たに集めたら二千も三千もあるかも知れぬ。北往来物は多くは千紙の位置のものである。沼島の体いろいろあるものである。実往復した自筆

山手紙は大体ものびいあるが、もう手紙の
論するに一課目をうすることもあるのを、自分の考へ
手紙のことを論議したが、往来物は、編んでこと
がないが、多くの研究を経て手紙としての往来
物を論じて見ようと思ふが、平安澄が中世の教
材として往来物を二十九種挙げてゐる、其目
左の如し

明衡往来
季綱往来
東山往来
西京往来
十二月往来

著者藤原明衡は治暦二年に
歿してゐる
白河天皇の前後
堀河天皇の時代
長寛二年以前
新十二月往来も以前

十二行

黄嶺問答
釋氏往来
新十二月往来
消息詞
垂教往来
山家往来
新札往来
異制庭訓往来
南都往来
十二月消息
庭訓往来
雑筆往来

建久六年の前
建仁の前
正治建仁頃
承元二年
建保四年
承久六年
寛暦二年頃
承久六年以後貞応三年に成る間
南北朝の末
永徳十年頃
應永十五年以後の十八年以前
室町初期

起ツの往来　　建文
富士見往来　　室町初期
清見往来　　室町初期
喫茶往来　　室町時代
右仁記清見　　文明二三年ニ、
尺素往来　　室町の中期
教児往来　　文明以前
手習文往来　　文明頃ニ、
風情往来　　文明の末
快言抄　　室町中期
新撰類従往来　　明応前後
農家用庸往来　　天文頃

十二行

以上廿九種の往来抄の著者は僧侶等の
何れかの手に成の教育所の武家の子弟
八佛家及農の子弟、之れを教ふ所の庶
民教育の為に後生ちなみ能ふ者
さる也

○昭和改元の初年は六月に入りて盡きんとする昭和二年を迎ふ、大禍中このさい打ちを慶し元朝屠蘇を嗜す、例年より天氣明うして市中麻痺の気なし、余六十八の齢を重ねて甲辰すなわち元朝のごとく麻痺を感ずること無し

毎歳除夜に感ずることは、ことし七無ることと一歳を重ねたることなり、五六年このかた別して此感かある、除夜の快感は此年の快感もこれなり

云へば、古稀もこゝのあるもの、なるが、おのれのかたゞを見ずして思ひのいたらざるなり

うといへども、とうもよいと知りあるかもしれぬ

八年ぶりにかけぬのが年の境をなすこと、なくあるべ

のは、どこかに古毒を帯びてゐる感情が潜んでゐるあるもの、実を云へば二十数年前の大患と数年前の大患とのみもたれぬ、別に毒身こうるおるものが、自覚えをなくて自覚をなすべし一年を省らるること自祝するのみならず、若しこれを考へて見ると自分も西園寺の朝に生まれたから春の天皇の朝に生まれたから、正に中興の朝に生まれたのは、昭和に及んで初めて、七十歳を長永くくと年代記の大断為を可なり経ることの比と感じたるを得ぬ。

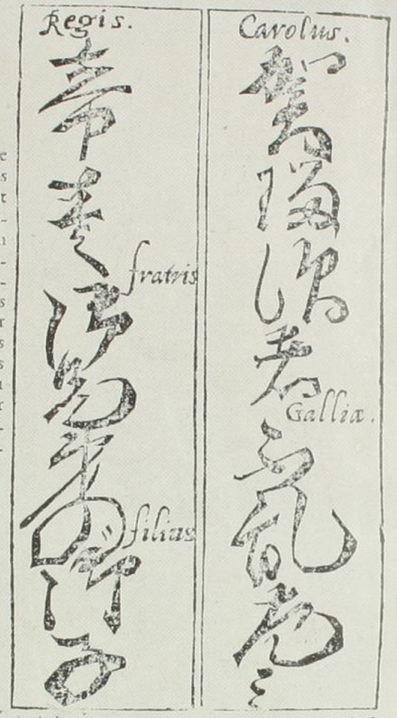
此年まで可なり往年の仕事をやつたのは生涯が終わり

ちうゐと自信する、此年の任歴と舊職の能
弘清間雑あり、其の終る所以なりもあるべき
七年を以てこすべきや、一年の計は歳始にあり
いふから、此年の優劣を生涯の大のある任歴が無
のみならずと自奮したみる。文章の上と就て等
といふ列と異なることもあるべいが、毛年よく夏ち
三才二の隠者を出だしたいと思ふ、一家のまに就て
小家者の改造を基礎とする為めに、其の資
金を作る為めに勧募に応集した回書を送り
拙ふ共者もあるべ、そんな止むを得ざる以上、習慣
性をそなへたる日々の回書買をつつり止めねば
ならぬ、翁子まで未だ帰郷が定まらず、秀の女もいまだ

十二行

嫁まらずあるべいそんな等の如きもつけ加へる
免角紙数の時が近づいてみるから本書
のまいやう運ハ祈へるまで、

Maintenant comme c'est que ces simples lettres se ordonnent & agencent en vn cõtexte d'escriture, en voicy vn essay presenté à monsieur le Comte d'Auuergne lors qu'il estoit grãd Prieur de France dont nous auons esté secourus pour la satisfactiõ du public par monsieur de Rouen son tres-docte & digne precepteur.



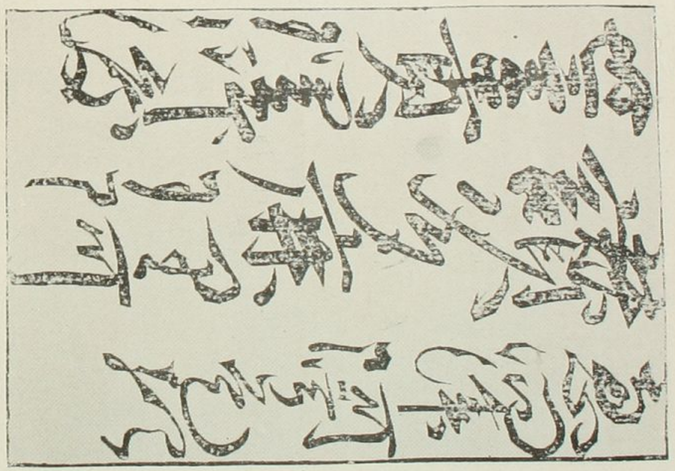
Ce qui suit, est vne copie de lettres patentes du Roy de Bõgo dedãs l'Isle du Iappon: par lesquelles il permet aux Peres de la S. societé de Iesus estãs arriués sur ses terres pour y plãter l'Euãgile, de bastir en la ville d'Amãgutie, vne Eglise appelee *Day Dogie*, cest à dire la grande aduenue & entree du ciel. Les characteres au demeurãt sont tissus de plusieurs lettres accouplees ensẽble par des entrelas, à la façon des notes Ciceroniẽnes, & des abreuiations ou chiffres: signifiãs ce qui est escrit au dessus, partie en lãgue lappõnoise, & le reste accõmodé à nostre parler pour plus facile intelligẽce. Par là on peut assez cõprendre ce qui a esté dit cy deuãt de la difficulté de lire & peindre ceste escriture ainsi abbregee & embarrassee: dõt il y a infinies sortes de liaisõs & deguisemẽs. A propos dequoy Osorius vers la fin du 3. liu. de son hist. de Portugãl, met qu'à Malipur, ville du Royaume de Narsingne, l'an 1561. furent trouuees au dessus d'vn autel, certaines lettres

Ce mot sera à l'imitation de ce qui est dit en Genese. 18. C'est ici la maison de Dieu, & la porte du ciel

gra

十二行

テレートー　業市市業
ＩＡ　ＭＡ　ＱＵＥ　ＦＶ　ＣＯ　ＩＥ　ＬＥ
ＡＢＣＤＥＦＧＨＩＪＫＬＭＮＯＰＱＲＳＴＵＶＸＹＺ
日本文字藏本（第三）



テレートー　業市市業
日本文字藏本（第二）

世界言語志の古版本

新村出

二三日前のことだが、神戸の愛書家グローリア社の伊藤長氏から人を以てわざ〳〵世界言語志寶典と題する古書を私に見せに送り越された。この本は丁度十年ほど前に京都の集書家伊藤小三郎氏の割愛によつて購入した稀覯洋書のコレクションの中にも在つて、我が京都大學圖書館の架藏に存し、それを大正十一年春大阪で催された印刷文化展覽會の歴史的參考品にも出陳し、その陳列目錄の二六五號に著錄されてゐるが、當時解題も寫眞も附けておかなかつたから、私はこの機會を利用して弘く世に紹介しようと思ふ。私はまづ兩伊藤君の篤志に對して感謝の意を表せねばならぬ。

世界言語志寶典とは佛國のクロード・デューレー Claude Duret が世界各國の言語凡そ五十數種について記載を試みた一千頁あまりの細字大冊本であつて、諸國諸民族の言語文字文學の記述のほか、古文献に散見せる鳥獸の音聲言辭までも書中に錄してある。記述は佛文である。著者はムーランの人で博物家にして博言家を兼ね、土地の法院の學頭などをしたといふだけの外、傳記を私は知らない。歿時は一六一一年九月すなはち我が慶長十六年だといふことが明かである。死んだ翌年の一六一二年の他序のほか、在世中の一六〇七年及び九年に書かれた拉丁文の允可並に序詞などもみねてゐるが、詳細は煩を厭ひこゝに省畧しておく。本題は、THRESOR DE L' HISTOIRE DES LANGVES DE CEST VNIVERSといふが、今譯して世界言語志寶典とした。私が見た兩伊藤本は共に一六一九年(元和五年)

の再版本であるが、初版は一六一三年(慶長十八年)に出てゐる。その初版本は未見であるが、コロンで印刷したらしく、再版本は瑞西のイヴェルドンで印行されたのであつた。

この博言集は、ベンフワイの言語學史はじめ言語學者には認められてゐないほどで、決して重要な著述とはいはれない、また今日から見て言語學上有用なものとはされない。西班牙國の耶蘇會士であつた博言家エルヴァス(一七三五生一八〇九死)や、露國の東亞探險隊を率ゐた獨逸の博物學者パルラス(一七四一生一八一一死)や、獨逸の言語學者アーデルング(一七三二生一八〇六死)や、すべて一括していふと、十八世紀末期より十九世紀初期にわたる約三十年間に續出した是等學者の博言集にくらべると、この佛國のデューレーの世界言語志寶典は、二百年程以前に博言集の先鞭を着けた點に於て注意されねばならない。分量はよしや小さくともともかく一千餘ページを算し、誤解不備が多いながらも五十五種の言語を網羅してゐるのであるから、ライブニッツが露帝への献言以前百年の編纂として時代相當に認めてやらねばならぬと思ふ。

コルディエーの日本書志(二七四欄)に由つて私の知つたこの書の初版と私の使つた兩伊藤本の再版とを比べると、頁數はほゞ同じやうであるが、今私が再版本について述べる所は、大かた初版本にも當てはまるのではないかと考へる。さて私が本誌の紙面を借りて特に述べようと思ひたつたのは、實は本書の九〇九頁より九二二頁にわたつて第七十六章をなす所の日本に關する一章十數頁のうち過半にあたる九ページほどの紙面に、日本の文字が甚だ興味深く刻せられてゐるからである。無論文字は木版で摺つてある。

デューレーが日本の言語と文字とについて記したところは、主として伊國の教師 Maffei マッフェー(一五三六生一六〇三死)の印度志(第六卷)によつたのであるが、此書は一五八八年(天正十六年)刊行された十六卷の名著である。拉丁文で書かれてゐる。デューレーは又佛國知名の旅行家テヴェー A. Thevet(一五〇二生一五八二死)の坤輿全志(コスモグラフ)(一五七一)や獨逸の編輯譯述家としてきこえたアルツース G. Artus(一五七〇生)の支那歴史(一六〇八)などをも參照してゐる。日本文字の翻刻は、マッフ

エイを採つたものであらう。然しマッフェーからばかりでなく、當時の佛國の耶蘇會士や學者及び貴族の手から得た日本文字の標本もまじつてをる。

デューレーは第一に平假名の伊呂波四十七文字と一二三の數字を百千万億まで擧げてゐる。數字にはアラビア數字が附記してあるが、それは正確に充てである。然し『いろは』の方は、僅に末の五字の外全然ローマ字を充てちがへてをるのは面白い。字體はよく出來てゐる。次に日本字が短冊形に二行書いてあるのが見にるが、右方の一行に、『賀瑠次者不亂左之』とあり、左方の一行に、『帝王之御兄弟の御子』とつゞき、一句一句拉丁語で語解を施してある。『カルスはフランサの帝王の御兄弟の御子』といふ義である。次に名高い周防山口の大道寺建立に對する天文二十一年大内氏の免許狀の本文の摸刻がある。字體は非常にくづれてしまひ、該書狀の摸刻本數多あるうちで最も崩れ方が甚しいものであらう。この大道寺建立免許狀に關しては、サトー氏の考證をはじめ内外の學者研究家がいろ〳〵書いたものがある。但しこのデューレーの說明は前人の誤を傳へて誤謬が甚だ多いのは仕方ない。今一々それを指摘しない。

この免許狀の最も古く刊本にあらはれたのは、今東京の東洋文庫に藏せられる一五七〇年(元龜元年)葡國コインブラ版の日本耶蘇會徒書簡集(カルタス)である。その以後、一五七三年の伊國ナポリ版の日本言文標本や、又一五七五年西國アルカラ版の日本書簡集にも載り、一五八〇年代に至つて、例のマッフェイがそれを拉丁文に譯出して、その印度志に收めて後、まず〳〵人目に觸れ弘く歐洲諸國に傳はるやうになつた。一五八六年獨國フライブルヒ版の一書に出てゐるのは葡拉兩文より譯出したとある。一五七〇年の葡文版とマッフェイの拉文とに據つたものであらう。今兩方とも手許膝元にないから比較研究は他日を期する。

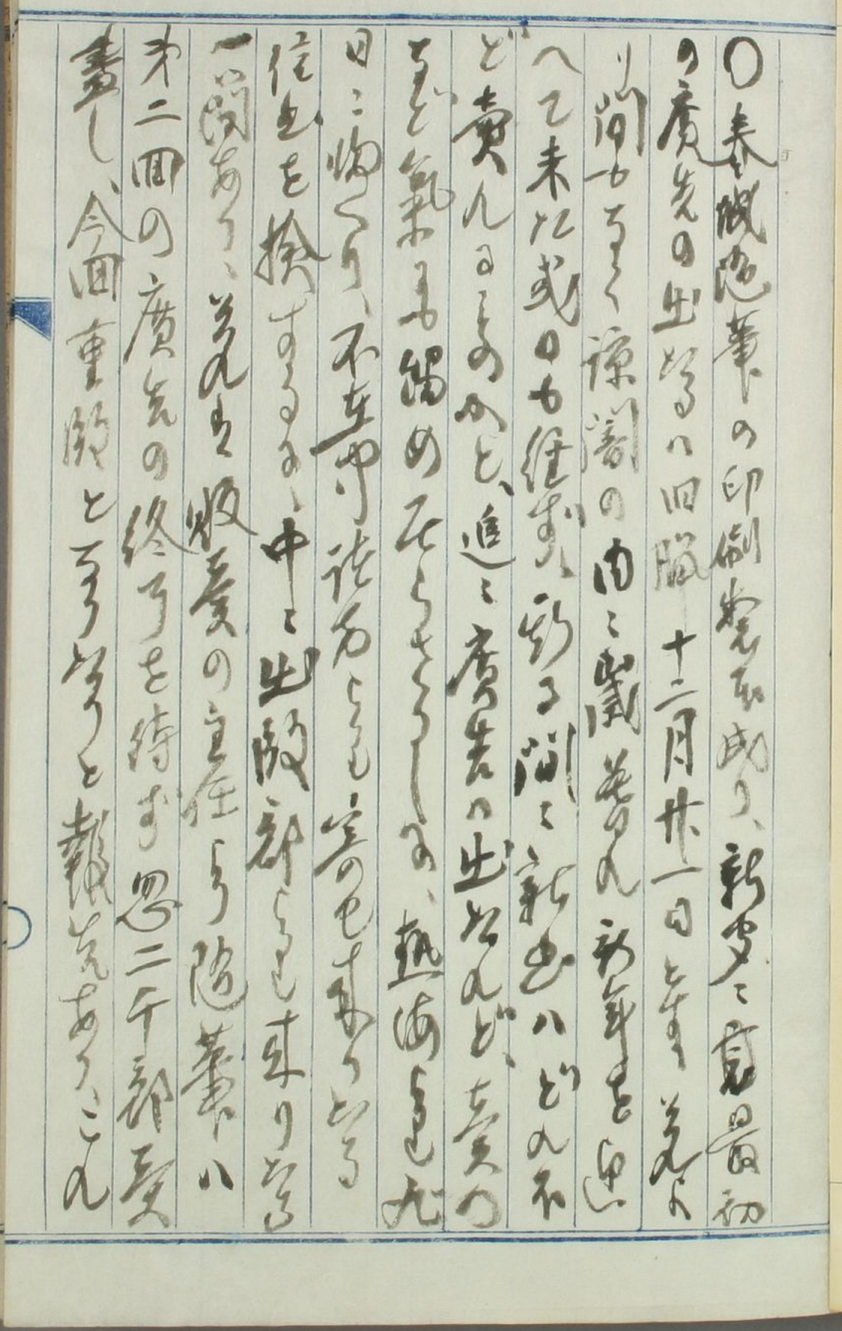
最後にゼスキリシトの御名と、サンタマリヤの名號と、伴天連エモンド●アウゼル師の姓名と、この三名を左方から右方へ三行に萬葉假名を行書にかいたのを刻した一葉がある。エモンド●アウゼル師のことは、本書九一二頁にも見にる。師は佛人にして

一五三〇年の生れで一五九一年に歿し、マッフェイの拉文を佛譯した人であつた。尙これらの諸書については、バジェスの日本書史の第十號をはじめ、殊に第十一號を一閲し、十二號をも參照すべきである。

以上要するに、日本文字は(一)いろは(二)佛王族カルス(三)山口大道寺免許狀(四)アウゼル師とマリヤキリシト、これらの四種であるが、第三の分だけは他の書物の摸刻によつたために字體が甚しく崩壞して形が辨せられないやうになつてゐる。他の三種は筆蹟も明瞭でみごとに出來てゐる。一五八〇年代卽ち天正年度の遣歐使節のうちの者が書いたのか、それとも日本から伴天連がもちわたつたものか、その邊は不明である。とにかく慶長十年代の西歐に於て印刻された文字として立派なものである。このデユーレーの世界言語志寶典の再版本が出た翌年に、南支那の媽港(マカオ)の吉利支丹學林で出版されたロドリゲース師の日本小文典を見ると、平假名を以て、伊呂波と五十音とを刻し、伊呂波歌の次には一より万までの數字を擧げてゐる。文字の發音は葡萄牙式のローマ字で示してある。字の筆蹟は甚だうるはしく出來てゐる。

この小文典は世界に二三本しか存しないが私の見たのは倫敦の舊キングスカレッヂの藏本であつた。明治四十二年(一九〇九)の春見たのであつたが、大正十年(一九二一)の夏渡英のをり、再び同校を訪うたが、その本は東洋語學校に引きつがれたといふから、語學校に就いて調べた所、そのをり此書は行方不明であつた。天草版の羅日辭典も不明になつてしまつたのは殘念であつた。このマカオ版の日本文典は一八二五年に佛譯されたが、極めて拙い譯本で而も以上の日本文字は削られてしまつた。一六〇四年卽ち慶長九年の長崎版のロドリゲースの日本大文典の方には、日本字は刻されてゐない。然ればこの一六二〇年(元和六年)出版の小文典の日本文字より、尙は古いデユーレーの言語志の日本文字は頗る珍重すべきものとせねばならぬ。

—(一九二六年十二月十二日)—



八釜が頭ゝ高のとまる所也、隨筆山陽のまくく
美人比婚勢多掘ゝ斯る孤東京
切の例ハ出股部と花も実と共ゝ咲きも
隨筆と題する拙稿未だ多くは目し
稿んず、心色場の所の山田敷城の
筆しなるハ左の如し
外に二三未刊の人ゝ隨筆中の談
を拾拾ゝ載りゝ元るゝ
知らさるゝあとあり

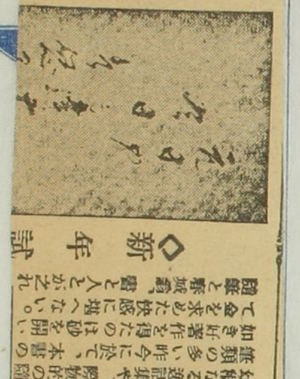
一月十日記

十二行

春城隨筆

黄頭巾

明治十四年の頃、ちこの一戦、盛況の一戦を師ば嘗て、
十四年、船の書、鶴と興味と伸ぶ、
明治十四年の頃、ちこの一戦、盛況の一戦を師ば嘗て、
十四年、船の書、鶴と興味と伸ぶ、



筆をそろへて

大壁畫を執筆中の大觀氏(中央)と觀山氏

兩畫伯合作の苦心の大壁畫

早大圖書館の正面階段を飾る「明暗」完成近づく

大行天皇御即位記念事業たる早稲田大學圖書館の正面階段の壁畫直線十五尺圓窓の揮ごう者は同大學で豫てから一流畫伯の執筆を希望してたところ横山大觀、下村觀山の兩氏が合作で畫壇も希望通り「明暗」に筆をそろへて揮ごうすることを快諾し、近來まれにみる壯擧として美術界の話題に上つてゐた

◇

ところが書き下す紙が一枚もので三間半四方といふ製紙業はじまつて以來の注文なので引受けてくれるものもないといふ始末だつたが、畫伯の熱望で富士麻今立郡岡本村の岩野平三郎氏が

はないかといはれてゐる

平和のお使 大歡迎

我文部省が

米國の少年少女から日本の小さいお友達への贈り物として可愛いお人形さんが三箱一つ一つ大事な平和のメッセーヂをもつて秩父宮様のお船に同船してこの十七日横濱に着くことのことは既報の通りであるが、文部省ではこの可愛い平和

支那

呉淞沖五十マイルの

アムヘルスト・ロックに座せう沈没したイギリス貨船勝利號の金銀貨時價約五十萬圓の引揚作業はその主任者が我澤水業界の權威者帝國サルベージ門司出張所岡田晋吉氏であり同氏自らも十二分の確信ありと報告して來てゐただけに一

場所が揚子江口沖合海水深淺で所で世界的に澤水の難所と稱せられてゐるだけにその成否は世界的興味をもつて見られてゐた

自分で、気を可として、なほ〳〵図案を二面、個が工風することゝなるのである、春雲から旭日の上る意匠は兎も角も珍とい云ひたいが、ナマナカ巧緻の工風をまゝ、雄大の趣がある、唯此の西風の意匠も雄大化まるのは全く業力に依るのである、何のもの直径二寸よといふ大理意で、紙の大きさは三寸四方といふ定前の大書画であるから、書くのも表面の仕掛を変まる、二方にレールを仕掛け西家の望しを為る枝が自在に進退し得るやうのものであることは図のごとくである、図はまづ寸法のあるから、元合ひの通り出来るが、此

日目新しと所ひが流れこと春雲に日光が映じて内子ツテある所なとは風今の及び難い所と箱取し場合図に掛てそれを日光の春雲を破り光線を漏らすもの也、工風がある殺ひ雲の内子りが銀色を帯びもあり、紅山に少け小金に紙を交へも塗ることもあれ、彩られ〳〵星〳〵星のから、星雲に調和するもあるべし、太陽は金泥で塗るは別途放射の光線を既に煙もあるこの通り用意する金泥丈でも千五百円を要する大額の仕用しもある墨も其の愛蔵の程度居の大墨を惜し義のもの〳〵廃りおろしも長さ

尺、許もあるのを出すこともあり、この一
筋の墨は何の為めといふ説のものもあるが、墨
の墨色が非常に美しく見へ、北の紙を作る
造しと福井郡本村大瀧の岩屋平二郎
といふが始まる、紙の歴史と禁裏御用のもの
少くて、紙の一歴史と禁裏御用のもの命
が大紙を造つれしこと、ド博九尺廿二間といふ
大きさで、三間四方、真っ白で、真っ白前であるといふ
此、十一月から十二月まで、あけの日の暮から翌
朝迄、まで面白つたといふもみれ、
光の紙を漉く船を四方四方ばかりで、コンクリート
で作り、まんこ、おるまるあるもの設備をもつて
七、試みに此の一面に、失敗しのち、手を抜き出る
の中間の紙面に、毫刷毛を生じたりといふもみれ、
北の毫刷毛を生じた原因は、手の動かし方に依るもの
で、二三番目人が、此の心を以て初めて功を
奏したが、壓搾やら乾燥やら、何れも未だ有の
大仕掛を要するので、これも一切ひらき失敗し
漸々に上風がつき、終に成功したのも真に天祐
であるといふ、北の製紙の村には、北神社といふ
祀る甲神社といふ名が付いたと、北の神のお蔭
とするのも、紙の原料は麻、立会、厂
役三分、コウゾ二分で、盟平受会といふこ

とゞめるゝいと珍しき比較ひいあるが、此流祖宗の
聖書の用紙に特殊のものあるけれども大きなる
質ものたることは此紙と違ふことに強く此流
祖宗の聖書の理論を解し此二書家が多年
大学の為の特と相違する所なりしなり
縁因と云はるゝを得ぬ、往年自分が川村清
雄に書かせし洋書「父子代の教」を改潤
「無料」を條件として書か
せたるこの比が今日のものを賀を要す
る必為である、早大に志ある者に極反者
の来歴があるのもおもしろいことである、一月十二日
志ます。

十二行

○板平秋寿伯の母堂が長逝されたので、去る深井の邸の
告別式に臨むで数言を表した母堂の告別式
告のうちである伯親戚の門名が所尸の徳川と
伊井家と共でおるのを見ても心あるこまるものし
感すべきあらう、伯の母堂は井伊大老の二女で
の配偶即ち伯の父は所尸から入つて高松の藩松平
家の主となつた人である、而して第延年寿して
桜田の変があつて、井伊大老は所尸の浪士の為め
に殺され、浪士の主家が使嗾したのであるとい
所尸と彦根とは仇敵である、怨のある中である、
当時松平家も此路をどんなに困られたであら
う、一時母堂は実家に帰へられたことも少

（九）

○紙後の高田の倉石郎が殺した此人は余が高田藩士在
社時代の友人で此人を除いては外村氏のみ今は友人らし
いものが無つたのに倉石氏も逝いた此人は慶応生れ
余とは年長である恩ひ出すことは在藩時代雪中
ある朝余が此人を待つて朝から勇猛を如何程の八九
時間も飲みつけも極度の酒豪とかしたことがあ
る倉石の家は酒屋で家が貧人でもとんでも飲め
るかと五升の酒を用意した家の五升が一升でも
も残つたといつたのは余が嘗て無いと笑つたこ
とがある

○雪の序で死亡者のことを序（一）、主原の引手原

原山に巴の婦おしゐが殺したことがあつた出てゐる
ことを蔭原が有りのまゝを見せ蛇び後の人と嬉しい山芭の暖
屋を造いたことがある、毎年七十を踰くも殺したこと
あるこう、余が青春時代序心という都間のあるこ
とある時茶の木という岳酒屋に無理に頼まれ
四畳半のうのむさくるしい部屋（上の方込み戸
を開け放しも酒を飲んでゐるも、おしゐがまず義
蛇びあつた時代から四十を取つて此家の前を通りか
かるつた、一番からかつてやんとしたのはおしゐを呼び
込み、席代がいつまで酒まきをしたのが生き
るのから、つ前の湊屋（質屋）へこんを入れて
らう借りも世話をしたいとしたこと長崎の七子の役

拜啓時下初冬の候益〻御清適奉賀候。偖て大隈總長薨去後間もなく其傳記を編纂せんとの議
昵近者の間に起り、故子爵波多野敬直君を其會長に推し、編輯顧問、監修者、執筆者等を定め、爰に
編纂會を起して着手以來拮据五年の歳月を費し、幾回か稿を改めて漸く完成出版の運びに立
至り申候。此傳記は「大隈侯八十五年史」と署名し、約三千頁を三卷に分ち侯外に、大隈家所藏の
宸翰を始め、維新以來國事に關する重要書簡百數十通を複製して巨大のアルバムとして添へ、
既往に例なき華實並備の大編著に有之、其記事に至つては侯の生誕起身より薨去に至るまで
細大漏さず叙述し、侯の面目を躍如たらしめたる一事は、拙生の最も快とする所に候。侯の經
歴は御承知の如く、毎に崎嶇たる險阪を渉るの趣有之、侯の趣味は多般にして萬有を網羅する
の概あり、其在朝の時と在野の時とを論ぜず、一日も休止せざる行蹟は餘りに豐富にして、到底
他の傑人の追隨を許さざるもの有之、隨つて侯を傳するは實に至難の業に候處、最も混沌を極
むる維新期の如き此傳に依り初めて明解を得たるも少からず、侯は强閥の間に常に介在され
しが故に、往々誤聞の傳はり居るものも少からず候處、如此は皆事實に依り闡明を得候。夫の
征韓の役、十四年の政變、條約改正等の大事件に就ては編者は最も力を盡して一讀快哉を呼ば
しむるもの有之、殊に晩年は侯自身が自らを語るもの多く、宛から自叙傳の如き觀も有之候。

侯の趣味の多方面なる其行實は政治・經濟・文學・教育其他社會百般の事に亘らざるなく、隨つて此一部人物史は幕末史たり、明治史たり、將た大正史たるのみならず、亦憲政史たり、外交史たり、教育史たり、思想史たることを得て、眞に萬戸必備の書として拙生の推奬を躊躇せざる所に候。但だ本書を廣く頒布するの一事は決して容易の事に無之、候に緣故深き校友諸君の援助に據るに非ざれば、或は功を奏せざるやも難計と苦慮罷在候。就ては故侯を永久に記念する爲め諸君に卒先購讀を冀ひ候は勿論、可成多衆に購求御勸誘の程切に冀上候。尚委細は内容見本に就て清覽相成度候。

昭和二年一月　日

高田早苗

頓首

○武田範之と云へる三浦梅園と朝鮮王妃を殺したる樋口勇夫の在人の高遇の詩を代作したる北人と云へる細後藤

十二行

年頃城の某寺の僧なりし校友石田義雄の家と同郷なり、在人の高遇の某氏保存しありしより頃の北人の遺集を出版せんとする者ありと云へり

○之れ亦海の彼方の在て十數のくさ半紙を亂筆にしも教化機関なるその海世俗の研究をやつも感する所が有つたのを、漢學の教化機関なるもの演劇と北洲語が明るく終人ひ為ましたる可きものがあることもあつたが、實際の頃のくさ半紙いまの北世界の底化を飾り変へ、其頃の彼の人物の日い抵抗無一線を引いたとて、後者の俗顔ぢうへが文化頃の人なるも、默やの後が進化も目を入れも、風幸七雄のう

俳優の仮顔をまつてみる、人物の趣を[illegible]、意味
深のを高尚面の人物の趣を擬したらいが、文
化時代までは、婦人の主腰や腰を露はしてゐる
国が後々見くるに、浮世絵紙の芝居の反映であ
ることは論ぜず、[illegible]と後人こうひとく、脚色
七多く芝居から来たものである、浮世絵のとりたは
人物を描くの[illegible]或る俳優の面顔[illegible]
似せることはうつてから、寧ろ標準があつて書き
やすかつたであらうと思はれる、([illegible]の著)芝居の教
化と引放しも浮世絵の教化を論ずることが出来
るのと知つた

○過日熱海の伊豆の別荘で高田未会氏にいろ〳〵

十二行

ち年時代の話を交へた物、あの頃は物價があか
つたといふ話が出た、五円茅が帝大の高等の給料
生び初め十円ぐらい支給を受けたのが後と二円減
らされた、其頃の学校の給料は四円位で[illegible]
れを支給を受けた[illegible]ら物のつ[illegible]たその流れが出た
伊豆が名古屋でも出て来すまで四日を要した
旅費が四円五十銭かゝつたといふ、自分が富山
市と四十日間事務者(富山)ともゆけと四十
銭の旅費をやつた時五十円の金を懐ろにした
十円でも残つたことを思ひ出す、北陸の車馬賃
の値段に乗のらぬと抵言つたのひあるが、事故(一〇一
間かゝつてゐる、自分の旅屋で夫を酒を飲人が

ちんがどのあるとんちゃい金中で破産の憂目をやつ
たこともあるから、百姓すると一円こうりたのである、百
円の流しも家和損益くらい未だ時十円の金も
拝の世帯しに勤る清貧世中とつんで
芝居まで見る十円と生り上りつゝあるに如何
ちんちんものあつに自分も十円むこうの人生も
海と一円こうるのに、内緒小田原と一泊し金が足
こうのひ旅籠大切なる如者入を我慢こ来き
旅費を借りも内緒しに事しことを思ひ起す自分
ハ叫ちう旅行をやつつけから不足を去はに泊ひあ
る、婚姻が花月の芸妓を稼いも借うこ口を糊しに
時代こ吉田松陰先生の国家の時代こ深谷塾中の国家

十二行

迫してあるのを見ぬ内に一年むこう会社の日誌を
置いたことがあるを溜り出でに物價があかつれんハ
こを幼稚なることも出来ぬのに、百円が地球庵
といふ養蚕屋の内中から養蚕代一円足らぬ
のに借りも来たことがある、此世中こ円の有賀
も確が悪蚕も後ろ立とし上に、この悪蚕
から切り地地球庵、出うける其都度百円
さんハどうしも足へぬと尋ねるのに、有賀も
煙餅をたしも実ハ一円の貸があるのに其為めに
あつたと少へも喫飯したが、一円と長屋閑印し雑
かつたと見へる

ウォーナー・ブラザース映畫

夜の叫び

全七卷

フィル・クライン氏、エドワード・マーハー氏原作、
エドワード・アダムソン氏脚色、ハーマン・レイメー
カー氏監督。

リン・ティン・ティン……リン・ティン・ティン君
ジョン・マーティン……ジョン・ハーロン氏
ヘレン・マーティン……ジューン・マーロー嬢
ミギュエル・ハーナンデズ……ゲーン・ウィットマン氏
トニー……ハイニイ・コンクリン氏
子供……メリー・ルイズ・ミラー嬢

梗概——カリフォルニア南部の牧場では多數の羊が毎夜紛失した。牧童のハーナンデスやシェリフはジョン・マーティンの犬リン・ティン・ティンが羊喰ひの泥棒と思つてゐた。然しリンティーを愛して居るマーティン夫妻や赤ん坊も犬を殺させなかつた。リンティーは羊喰ひの犯人が兀鷹である事を知つて追驅けたが、何時も捕へる事が出來なかつた。或夜兀鷹が死んだ小羊を落した時リンティーはハーナンデスの犬と喧嘩をした。翌朝血泥れになつて跛を引いて歸つて來たのを見たマーティンは誤解して銃殺しやうとしたが、無邪氣な赤ん坊は犬を殺させなかつた。ハーナンデスはどうしても、リンティーを殺そうとした。然しシェリフは遂には羊殺しが兀鷹である事を知つた。兀鷹は羊丈では滿足せず、遂には赤ん坊を迄攫つた。これを知つたリンティーはハーナンデスを倒し、兀鷹の巣喰つて居る岩を襲つて赤ん坊を救け出して目覺く勝鬨を擧げて歸つた。

説明　丸山章治　福地悟朗　伴奏曲目選定　貫洞喜代治

去る日曜日の娘と妻とを伴れて中之島の映畫館に入り夜の叫びと題する犬の映畫を觀て帰つた。六兒を越ふた、妻と大龍の犬を風呂に入れた。

○本年之のうち最寒さも仲春の如き温暖の日ありて、暖かきは寒きを傳るとは云へ近頃の一週間程前の國民流行せるが如く世界中を通じて流感相極めて多き日なれども遂に猖獗を極めんとする徴あり、北寒日は六年目に見ぬ寒さ本年は恰度昨年の如き多年の寒冷なるも高熱の病人多く殊に嬰兒の病者一種の菌を培養するものなれば氣候の関係か一種の菌を培養するものなれば氣候の関係か北の病はコレラなるべきものなるべし。

パラマウント映畫

ペンキ塗り立て

全七卷

レヂノールド・モリス氏原作、ロイド・コリガン氏脚色、アーサー・ロッスン氏監督。

ドン・ペドロ……レイモンド・グリフィス氏
ビアトリス……ヘレン・コステロ嬢
クローディオ……ブライアント・ウォーシュバーン氏
マーガレット……ナサリー・キングストン嬢
ベネディック……ヘンリー・コルカー氏
アースラ……グロリア・ダイポート嬢
レオナト……バッド・ジアミソン氏

梗概――或る島にドン・ペドロといふ獨身の男があつた。ドンは大金持で好男子だつたので絶えず多勢の女達にちやほやされてゐた。其の多勢の女達の中でビアトリスといふ美人をドンは本當に好いてゐた。所がビアトリスはドンを勿論好いてゐたが、友達から『貴女がドン・ペドロを騙して求婚させることが出來れば何でも差上げる、賭をしませう』と言はれて、つい其の氣になり、見事にビアトリスはドン・ペドロに求婚させる事に成功した。ドンは彼女を本當に愛してゐただけに惡戯半分に茶化されたと思ふと少なからず憤つてビアトリスと絶交することにしたが、彼女が他の男クローディオに取られさうになつたのが殘念でたまらなかつたドン・ペドロは兎に角ビアトリスと仲直りして結婚しやうと決心し直した。すると或る女がビアトリスの泊つてゐるホテルに暴れ込んでドン・ペドロを自分の亭主と間違へてピストルを亂射したが大騒ぎの基となり、次々と色々な喜劇が突發した。其の爲めドン・ペドロとビアトリスの結婚は到底駄目になるやうだつたが、終に火事場で二人が落合ひ、芽出度く結婚することが出來た。

説明　山野一郎　　伴奏曲目選定　貫洞喜代治

さるの恐れなきにあらず偶々其病を憂慮せしもの所以也死亡の者多きは我邦の如き衛生の思想なきこと多年にして今年に於て尤も甚しかりしなり今の所死亡者多かるべし尤も疫を経たるものは再び疫に死亡率の多いのは小児に疫に逢いやすき故なるべし

○昨年の十月頃より神経病に苦しみたるかの如きの病状なりしが其後三週間程にして病床を去りたるも尚ほ大略ならざりしが其後の大患なりしが特に龍之介氏の病状の如きは現実に入りて帰来仏像の如く疼痛を感じ

十二行

殆んど主治医の癌腫の発生あるべしと云ひ此の発見の為の状態なりしが別庭田後の発見なりきと如し然るに病状は日を追うて悪くなり昨年の二月頃から家族の人々も最も苦しき経験をなしたり

早大の初時の教授なりし新潟学校の教師なりし田代校に学ひたる経歴もあれども自分と同志の経歴もある亡友高山(樗牛)の門下と活躍の跡を取り高山と古河の関係より来る

山政後古河に入りたるも高山と古河の関係より来る

然と云ふ長い交りであるから自然金子古河のことなる

典の比、鉱毒事件ひ、古河が政府にも面倒の

の上にも命をとられた時は古河の老板であるが此

田のまゝひくれば他に於ては其際偶々改正堂

で横嘉平の調査委員を命ぜられ横嘉地と古
河の事を視察せしめ候時偶々余と外二人の
同僚が共謀して横嘉を陥れ候と
寝ずに働らいて責任を果し
たことがある、其後神戸住大典の時今の古河を
男爵にする時も昆田を推薦してやつた物
句に余を投じて来た、時の首相大隈伯に余ら
が説いた結果、古河は男爵を得た大典
の際に外国人が異議を唱えたりしたが大典
で昆田の気象を称賞し其の間に従
来つてあつた余を訪ひ来つて大隈伯に紹
介時機を内密にしたことがある、早稲田大学といつて

十二行

やはり行を任命して見たいと日論見其の事者に昆
田をと見南をつけ古河の主人に余も相談を
申した時昆田に下命相定した時ひあつ
たのだ、日比田が辞するまでもなく、こちらから手を引い
た、実は昆田の性格、頗る辛抱強いのが長い目古河
の勤めをつとめ、根気の地位を得たのだ、早
稲田でも昆田の為めに第の表に思ひ、あれなんば銀
行を開市とやる本人の為めにもよからうと考
へたのだが、主身が病おとまりとなつた決
したのだ、自然銀行往来も病あとなつた昆
田はの性格の男で同人に重きをなすもの
の本人は一向功を急はなく人の使用を人に

徳つてゐる、口ぐち減ずこと少かめ、弟兵ハよく子の
けんを、其故ひとく成る人に譲つてゐる、先の西山
の門家なる追悼会をやる時をハ昆田が自
事実上の主人と為用も大概自分ひ弟してゐるのとが
いつもふさくなる、余を推し立てゐる、ゆゑ徳
譲ひ、ゴこと縁のたの働きをすることを富ま本
意としてゐる、あれなどの地位に立つて、飽まで自分を
韜晦してゐるのハ今日の世のやうな騒らしい、全体自
から奉することが嘗し傳く、震火に罹つて大阪の人
ら貴つた家を失つたが、其後偽家生活をも家の
復興をとを企ればもしなるの、えんでゐて人の窮を救
ふるゝ少しも惜む色がなく、ゆゑに金放のがよい

十二行

何の人こいろく世話になるとがどれもある
が知れぬ、昆田の心貴い新男田の人第い清しよ
くなる、自分をも新男田人とぬまるのが、昆田
こもつてハ全く異なるを異つてゐる、恐くは昆田を
共の西山の性格を充分見て得たことあらう
但祖父等の動かるゝ、前と奉けた一二の性格も
西山の通りであるが、西山肝要の點がよく似た
ゐる点ハ難ること、動して清しく帰易もの、ニンキ
リムツ、り辛抱つよく、常つて、結局よく解決も
出けることがある、早大の騒動や其他の難るを
変現れることの時なる人ひある、事の出金に此人
の考り口を見ると、ゆるゆる不得要領ひ人をも

懊悩を気くどくあるが、さすがミンチリハッキリ考へ
ある内するとどうやら解決がつく、勿論八方奔
走をつけた、幸抱負の○く働く精力と気根と
動つてい新股もさるを得ぬ、彼れが命社の難件
を理するまで必ず同しゆう調子であらう、彼れハ後
援する人事を重すること[illegible]趣味としてお
らるらしく、いつもや人事の事ハどんな面倒の事
でも出来ることハ為ハといふ[illegible]確かな自信が
あつたから相違ない、こんな性格ハどうしても西山
[illegible]の[illegible]得ぬ、あと思のある早稲田の騒動後或
年のあとまで私の意思を眼近者が張つた時
の異論が強く出てかゝり、いつもの童で頼人
[illegible]演説

などを避けるのに北時い自から進んで一場の演説
をやり、先生と長い交りなが先生を知つたのハ
早大騒動と就て為ると言ふた、私が印刷物に
の評議を重理した事を変へ、あるとが職
工の評議と直面した事を変現されうとい思
ハうつたと言ふた、時ある真相でもつて、その真
情を吐露する場合ひ[illegible]あつたけれハ題するのが上策で
あつた、長い間大抵日曜ある私を訪れ来ること
が例で、私の母校と勤務してある頃ハ、話次学
校のことを語ることも多かつたあの人ハ自分ハ
多く語らず人に語らせることが多く、笑を少く
のを興味とした、政治法[illegible]も[illegible]程

があつたと思はれる。友人が大切と思ふ人が病氣回復絶望とあつても其と同様の思がある。

早大の合評規定を決定せざる一年以上委員会で論議した結果委員であつた、四委員の山田英夫氏が執筆の自説を固持するのを手直すもらせられたのを昆田が氣毒に思ひ遂に山田氏を説つたことも昆田の性格をあらはす一例である

昆田の作品が余と似て居ると一時昆田に言はれたが二十数年前の作品の多数昆田宅の宮殿を見ると寧ろ似てゐると自覺した

十二行

良寛禪師の肖像に就て資料たるべきもの蓋し四作あり。其第一は禪師自筆の肖像なり。禪師は画を道友有願居士に學び、布袋、鶴、髑髏、盆踊りの圖などあり、巧者にあらずと雖も、皆筆者の凡神を偶ぶに足る幽趣あり、其の自像の多くは画讃にして、如何にも枯淡蕭散なる気分あらはれ、観者をして親しく禪師と相對する思ひあらしむるなり。凡そ画家にまれ、彫塑家にまれ、目的の実物なき作品は偶然にも能く作者自身に似るものなりと云ふ、況んや自像なれば必ず禪師の容貌、凡姿を髣髴するものとなすべきなり。第二は禪師を敬慕し、禪師に親炙せる者の描寫にして就中島崎村の僧遍登子は自ら禪師の法弟なりと称し、慶応元年（禪師歿後三十四年）上州前橋の藏雲和尚

によりて上木されたる、禪師の詩集の巻頭に掲げられたる坐像は遍澄子が精神を凝して之を描き、尚ほ貞心尼等眤近者の合議をも経て、貞心尼が之を捧持して藏雲和尚に手交せしものなれば、最も信憑するに足るものなり。其の他羽前の画家にして當時越後に留遊せる九木氏の描きたるもの、又禪師を崇拝せる亀田鵬斎先生の描きたるもの等あり。皆参考資料たるべし。才三は血族の研究にして、例之ば禪師の甥なる三條町加藤新一郎氏(現代重助氏の曾祖父)は、能く禪師に似たりと云はれ、而して其人は背高く、顔長く、鼻高く、眉目秀でたる人なりしと、三條町の故老の言ひ傳え、并に加藤家の直話なり。才四は故老の口碑にして、余が始めて禪師の研究に

志したる今より四十年前には、三島郡、西蒲原郡、南蒲原郡寺に、禪師生前の事ともを、禪師に親炙せる両親や、又は親炙せる故老より直聞したる人々少からざりしが、禪師は背高くして健脚、顔長く殊に頤長く、鼻高く、眼は少しく斜視の気味あり、服装の枯淡なるは勿論、常に黙寂悠々として、好んで児童子守り娘などを相手となし、慈愛満面に溢る、間にも、どことなく気高き相貌を具えられたりと。

我越後出身の彫塑家林澤清君、多年禪師の鋳像を心掛け、余に相談されしを以て、余は、従来禪師の研究に従事し資料に富める諸氏に諮り、敬生に互りて前記各件の資料を漏れなく提供し、君は丹精を

疑し、苦心を重ね、遂に初志を成すこと再たらず、尚ほ幾度か諸氏の枉臨をも経て、今や深き信念あるものを作り上ぐるに至れり、依て此の鋳像に助力を与へられたる諸氏、并に禅師に縁故深き諸氏と共に、謹んで之を大方に推薦するものなり。

此鋳像を作り上ぐるに、就て、佐藤吉太郎氏の資料蒐集に多大の労を致されたる事、桝澤君の多年師事せる武石弘三郎氏并に画家安田勲彦氏の、各親しく意見を加へ懇切を致されたる事を特筆して、茲に感謝の意を表す。

昭和二年二月十日禅師九十回忌日

田代亮介拝記

良寛禅師の像を作らんとする際、最初の研究に比し良寛の真像と別記のことくである（二月十九日記）

○春陽来て梅花開く頃、曼珠沙華の大輪、……梅花もかすみ、こゝも春陽来たれば、余と編輯を托し、余の名を出版せんとしたるも、余、編輯を辞退して河田相談し、編輯せしめ相当に骨を折つたが、余の名を出すことを辞退した。同好史法令といふ実在しない編集者として、余の序文を作らせ、余の名を傍らに、余は金銭上の関係を全く離れ、一銭も出さず自分は銭金を取らぬと初めから奉仕して了した。

九の日比吹百五十四の両金を寄せて来たれ、あるいは
よく出来たから賜ひて来たると見つる、北書は維新
前初の頃一部刊行せられる、大正七終りて年弾が変
つて元んぱの流の初年は金と書とあつた頃があり
その頃の頃まで、六百頁の
厚い本で、故光の直流を東洋記したものが多く殊
に市井の逸事が多いから、読んで甚だ面白い味が
ある、或人とすべてが文献に無い事実であるから、維新
の側面史料とするに足る　一月二十日記

○偶ま本町に教育研究所に同書を送る、庶務部
教育八史編纂志一帙を贈り、こんなう史
料の原本ちうもん、取つて閲するも五百部を

十二行

支那に於ても印刷せるものの輿論あり、
官版いつしか支那に於ても出版すること之れと同
つて知らる、養蒙と光緒九年春鎮海張壽
榮の序あり、北書の文政八年日本の刊本
なることを云々するの文政八年刊行
八年刊」とあるは、ふーく
が版書きの印刷せる、五百部の官版の式なり、五
官版の原稿本を得ること微すべし、我国の
学術に一部あるも、今甚だ難し、余が
北の支那書を嫌ふといふ、重複を厭ふ更に
一月廿日記　余部十六冊也

○近ち得た雑書左のごとし

一 默菴靈廟書　一冊

稲葉默菴の自筆にて靈廟未だ詳かならず默菴の深く敬慕し敬すること甚しく靈廟の廟を言へか、若問侯の義類あり

一 碎玉劍掃　五冊

嘉永四年岡部格堂の序あり、著者世〻流布せるあり卷尾に頼三樹の跋あり、北吉全く版式を異にす東京の墨痕必携と版式同じく、他版は北版の後に出たれど、北版優り、且つ稀なり

十二行

一 戸籍考　栗田寛著　写　一冊

戸籍考栗田の集に収めあれども、北の当時多く戸籍の古文書を収めたり

一 百錢譜　写本　一冊

明和年間勝田寛斉の著す不中山顧山の百錢圓が百錢を公卿大夫庶人の立等に引つる次第なり、引を更に訂正

一序位を変じたること也　銭屋の跡を

一日米通商條約稿本　一冊

森有礼の撰ひたる原案と覚しスミス

が仔細に批評をかくたること也　撰心大

花者と刻したる見紙に字したる義

しなる也

一尊州の詩評　二冊

王世貞が同時の詩人を評したるもの

なる詩を載せ其比詩人のなく

十二行

の名を各々其人の任歴を録し概評

を附す、嘉保年間の刻なるべし

首部元春の序あり

一奥能登塩稼之図　一冊

製塩の功程を書し附するに用具

の図を以てす、書手の名を闕けり

図は西之丞也

○貧乏人は玩具と特別の趣味があるものゆえ往々外国

から或は各地から、玩具を寄せるものがあるのゆ、

集めるもなし、相南に数かあるゆ、かつて義之の

様、書架の上に並べて陳列して置いたこともある。今迄は一向に問題の研究をせずにみるのだけ其説をせずに、養育と婚礼に関係ある物や鬼や猿などの類もある。本心は公の為の為りと各地の特色ある玩具を集る所があって、それから時々婚つたことのある。百種も集まって日々あるも何となく面白味を感ずる。殆ど地方によって意味の違ふのがあるを以て古い原始的のうぶの味が漸次に消えて今出来る利巧ごとも多くなる傾向もあるが、まだ多くの昔の説味がある。此点に於て弥彦に於ける人形時代玩具庫

にセルロイドの鳥があつたのを見て、これからも此物は変化してもおもしろ味がなくなる。今の内に土鈴の鳥一双を買求めることもあつた。他日はコンナものが困難となるであらう。尤も今立風を凝らして新らしいものも一概に排斥は出来ない。奉良び必ずしも必ずしも竹細工の産地の浅草の中底の伊勢屋が売るものもある小品玩具の中でもおもしろいものが往々あるコンナものが陳列されても合格する。自分の現在玩具庫に可なり大きな部屋二つばかりを入れてあるが、此が雑種用として別に保存してあるものが少からずある

其内合類しても玩具類は入るべきものもあるコンナものを散漫に陳列しても買いたい一向に興味をそそらないから、棚を造つて一切を美と並べておきたいと思つてゐる、自分が骨董漁りをした頃玩具骨董趣味から得たものもいくらかある、支那の木彫の人形が四人一揃子を圍んでゐるこのような物は特に珍しい、又玩具の巻物は近つたまひるるく玩具に準ずるやうなものもいくらかある、例へば小品の仏教彫刻の唐の金銅仏の類、銅製の虎符なども玩具に準じ得るものあらう、西洋の狩猟家が其趣味で集めつた

襟飾りや徽章類も玩具解に入るべきもの多い、の玩具類と共に、此等の遺愛品もあるから棄てる事なるものが、玩具類と同一所に保存しておけば、終この物もこの夏もあるが、外国から帰つた友人の土産に特に物つたものも一箱の日記帳品と見るべきもの、此等も陳列棚に飾つてもこれを初めも意味をもつまする、北のときき合い瑞西の国会の家屋、婦人の像等化粧鏡、箱もあるが、スポルツを網牌の国刺繍ものが十個ばかりある、これも玩具新類で一つや二つを書籍としても用ひらるべきが十個もあると陳列せず仕舞おくのも惜しい無駄がする、コンナ風に考へる

家蔵いろくのものあるが今朝開に乗じて思い出るまゝ○千もあるものを取り出し試めに元禄頃の蒔絵の硯箱の大小二個の箱に入れ七見に此箱を自身も実に玩具入れ為するものである、

一月廿三日記

日本一俗ものの一対　中宮殿　伊太利製手帖

白磁のスワン一双

乾漆の魚一双

陶磁木彫像物低　信机小品　カナメヤ製

伊太利製酒瓶小品

ギヤマン海獣

キリレヤ幸福の鳥

電信機模型

小祠　硯形墨

絵馬類小品

竹製　三個

ヨシヤヅリ二個

奴凧

紙屋ぬ千社札

扇子三

魚つり

ギヤマン薬入

スポーツ鋼弾一ト

ハサミ二個

十六むさし

うちわめん

エデンバラ名所図

東海道廿三次双六

大津絵人形

おみくじ

千早人形

八犬伝人形

山形安野セキレイ一双

陶絵模造

浮世双六の蓑

蘇民将来

お伽婢子

三春の馬

猫魚の鈴

ハニワ土偶二

四重塔　陶器製　仁清作

百人首ウバカルタ　瑞西製木彫婦人像
銅製唐箪笥　影像
支那製木彫人形　卓子并杯盤
仏国製陶製鳥　朝鮮人形　二対
朝鮮玩具帝　大坂戎玩具
京都人形　一箱收　台湾土偶
銀杖　羽子板　模造　十箱
木魚　〃　紅毬　模造船
馬蹄　〃　金本位紀念銅牌
奈良人形　雛　一具　外内人一箱
甲　カナメヤ　面　木彫　土製
犬張子　一双　天神　土十枚

十二行

銀銭　古流字
土製瓦茶壺　七箱　花瓶　外ノ
羅馬カンテラ　模造　朝鮮ナイフ
銀器　憲法発布紀念　父母牡丹形　紀念カルタ
木工家紀念　扇形
アイヌ器　二　伊太利製　木製船
楽立亀鈴　古鈴　其他信城紀公名
外国製郵便切手箱　銀制歌紀念章　三
別府木ひし　富士女ひるま
日本人雑子車　信州上田藩民物産
亀戸闘鶏箸　仙草　同上
浅羽荒宮八幡　米国宝屋日上
ウ石太宰府　柳川雑子車

主作人形
支那の美鳥一双
竹細工席
朝鮮産妓 陶器の類
大佛殿木材香合
奈良春日神鹿二
瑞西田舎家風
摸御新製の新茶合
古近樹材小杯
思ひ出るまま家苑の玩具并に雅玩品を書きつけた
るに左の如くであるが、苑園の美に買きある玩具類
中にも人を思ひ出し為に好きなる、者迄多く在に混じ新
るものゆえいくらうあらん
一月廿四日
朝鮮製音楽者
玩具二
追加
トーテンポール
猫の犬
ゴエエンヘン製衣ビールのお類

玩具のつらね

お伽外史
大江小波

遠うら、者の者なる降け、雷門の玩具店。近くハ国も宮ア川。かはも
が早い世の中に、古きも流まで、新しきに流まで。その中店の伊勢勘と、
神の守の正直者樽。仕掛からくり品ゐの、その飛ことエまい燕らせ。價餌
に飛ぶり跳ねくりの。掛引きらにヒッるぎ。つくい仔盛りの物機嫌物他ハ
やらじの三番曳。春ハ焼野ハ雉子笛。秋ハ夜長ハ祈鶴の。慈愛ホ富まを
数を様方。翼ふたゐ達に教へられて。浅瀬まあらの海仲に物案箱の物帰
りま。必らずゆ玉より下さるを。ホ粒あぎらるあらたちを。一寸八分の物利益
と此所にあ知色めし。絵ハと。主人ま代つて
例の餓鬼大将。ホ、出しゃばつて自ス

浅草
仲店 伊勢屋勘兵衛

幸福猫　木製　西洋玩具　紫撫

猿　猫　犬　玩具　撫

紫檀　猿　木製

流しひな　鳥取

牛

木製　猿　土製　肥後

猫子　柳沢侯　木製　鳥取

猿　木　小堀　紫檀

土製　鳥取

雛　大阪　紫檀　寺　龍　木製　反物

江戸絵馬つくし　四十絵紙　二包

多賀人形　木製　紙ひな　古時

彩輪　別府　彩色

木彫足長人物　外国産　紫檀

源氏人形

源氏具　紙ひな　古時

源氏かるた　鳥さしかるた

○吉井川の河原金二百村光雲が浜辺をなす高砂
で浅草の茶屋（約二時間ばかり）に出る人浅草
に生長したとかで、其話る事浅草の全部に及び
各所の地理や商家に面白しいことゝ非常に多く記憶
のよいのを驚かせる程得るところ此、今も此浅
草の観音浅草寺附近のことを聊の左に紹す
ること）きめ
今の中見世のある一方の高時二十軒と唱へし
茶屋がありと美しびあり、登楼者の身分
のあることの多く休憩に、又は義の利
いと美人かゝり此、多くの此の茶屋の様を買つ
て妾ることせらせたこの此と云ふ二十軒の名

一月例會國醇會報

昭和の初春、二十四日上野の梅川樓に開催、市島謙吉氏、高村光雲氏、香取秀真氏、高須梅溪氏、西沢笛畝氏、灰野庄平氏、都築氏、篠田、河野、斎藤三幹事打揃ふ、座談の花まづ咲き、都築氏先代の八丁堀興力時代の話、光雲翁の昔の金銭勘定、ソレより就き香取氏から「天保銭一枚あれば、湯へ入り、ソバをたべて、寄席へいつて、夜鷹が買へたといひますが」光雲翁「全くです、夜鷹は二十四文だといひました。夜鷹びつくりモグラモチ　△モグラモチびつくり夜鷹の屁ふど川柳がいひました。夫から夫と男女混浴の銭湯　△町内倶楽部の髪結床の笑話実話があつて、當日の講話『浅草の話』は、改めて光雲翁から横丁々々の微細な亘つて聞入つた。就中浅草名物の話さる、列客悉く陶酔して金物屋へ一軒は小言屋、小僧よりも小言をいふ主人があつた、一軒は駒形の△△△伊阪　これはおかみさんが立腹して居たこのお話から、駒形名代のどぜう屋が巧みに喰逃をつかまいて、井戸水を汲ますあたりは、話す翁も油が乗り、聽く列座も恍惚たるものであつた、次回更にお話を續けることゝし、甚兵卫の食膳につた、これから市島春城翁の酔興座談に、梅川の女將も加つて本年初一會の大賑ひを呈した。

『端日斎藤幹事から、幽谷東湖の肉筆『万國文字攻』詠歌大概抄　△市島氏　文字攻の幽谷が鑑定を乞ふ、△市島氏　文字は珍ふるものと推稱された。

八坂の宮寺の十新殿とも
錦絵用の庭の中所に本殿があつたが
淺草の観音院附属の庭があつて、ここの庭
の茶屋に朝茶の観音像が添いつてゐたの
で寄贈した

雷門の附近に天満宮があつた茶屋表
角觝が奉納した絵、表面に日下開山雲龍
久吉と名を刻してゐる。ここに
行つたから分らん。元柳橋どこ
人形屋で名高かつた武蔵屋ひすうく精巧
の玩具を売つた、舟橋屋といふのも、十四五
で俳諧を意義なエロテックの玩具を売

一月三倉図書館寄贈

つれ

トンダリ、ハチタリ、カワツタリと唱ふる滑稽

を既見を喪ふることのあつれ

雷門から花川戸へ行く通路に面したる

ハケと全く異つた、美味の酒屋があつた、美

味酒屋を干し込、夕刻まで美色

こ公記情博をやつた、コノ酒屋をかうしや

といふた、

会釈を挙げると雷おこしと和猫懸の北源

から、金記山餅といふが名高く、都鳥

といふ菓子もあつた、敵音前まで やつこ

といふ饅屋がやスイといふのを評判を待

した、大繩とふ力士を出した菊菱屋もあつ

た、大谷良茶漬がある、茱萸しやもあつた並

木の方山屋といふ酒屋が名高く、ここは

多くの銘酒を喪つたが、麦酒といふもあ

つた、前川といふ饅屋は今もあるが、やつは

のてんぷらといふもあつた、城後屋といふ土鍋

屋が名高くこゝも烈酒を三合と制限

をした

并林の新形堂の門口をまた紙が貼いた

ことは出しかつた、新屋が表のまつ新形

あるまるとすぎすといふのをまた美を語

つてゐる、新形堂の向河岸まるまるコンニ

しに森があつた子規もここを極め、川を
渡り上野迄、徒歩来した位（や）地形を
見しらくらい
地形図を亦初蔡のバラックもあつた
とかで アカサ屯の別称があるこゝは三社
といふがあるこんもり川も絞び日 捞ひあけ
た三人の遺体を祀つたこの、浅草寺の境内と
ある十社といふが、捞ひ上げた観音像を
アカザの根元に入れた十人の小仏を祀つたあ
といふ
観音堂の背後にある金仏堂に朝夕
鐘を撞いた、其の名が四時と少ことえ観音

十二行

新谷を流れた、境内の花屋敷といふ
八月末頃三人の鶴の絵で後に同じ花の
ある木とは異つてゐる六地蔵まで久安
の年號が刻まれる、奥山の西のといふ
料理屋もあり其頃まで賑はつた
此に高底の名物があつた小道具といふ絵
の具屋もあつた おはぐろぶしを売る家も
何もあつた、江坂といふ
あつた、三大中ぶしとしたこの、そこの細長い巷に
金物屋もあつた
して立膝で白粉を塗すといふ 私からお
まんこ江坂と人いふた、斎家で絵画屋

もあつた、

、、、、

高村と話次髪結床の話が出た、高村のいふまい苦しいこゝが一種所内のクラブで所内の新聞をまづ凡をこゝで論議さる、所内の雑誌をまづ凡かゝアかるい、あの女を世話したやんちゃいふて結婚の話もまた話した

其時の結髪料は三十二文で天保銭一枚（九十六文）で髪を結ふて洗湯に入り、手拭一本買つて、夜磨るも買いたとハ結髪のやすさ〻ゝ驚ろく

洗湯のザクロ口といふ名の由来うつきゝ

村の人鏡を磨ぐ〻ざくろの鄭を要する所から、かゝみて入る、鏡に要るといふ所から来たといふのもく湯敷ちびある、

○著書ハ交際の媒妁であることを沈深感じた、自分の著述を世間でいろ〻の人が読んでゐる、未知の人から之のセ来る書状もありうるいが、偶々未知の人こ出逢つて、自分が著者であると分り、種々の挨拶をする人がある、言葉定で未知の人でもあるのが、地頭、陶器、山陽を読んでいひとく感服した

といふて、昆田の臨終こ朝吹常吉が自分のあらゆる著述を読んだことといふて私の傷泥七隠

華山洞の体に倣ひたるものと云ふべく、作者未詳
と明記せる人と昌の先輩なる式に坐を列したる時意
外なる人の著書の愛読者なりと名乗りをあげ
たる、波多野氏なりしが、迎接間もなく二冊まで
出したるは、自分は交際かるいから自著を好う
せずいかに実業家なりとは、集の目的
波多野氏から頼まれたる以上、ツマリ陶冶の目的と云ふ
ものらしいあらう。

○舞踊中央公論に掲載せられし山東京山と
鈴木牧之」の長篇は二月号に掲載されたる
ハ北国雪譜編纂の経緯を京山が牧之と
寄せたる前から頼まれ時候にもつとも

十二行

適業に相違なる以上、公論社、
は勝手に寄稿したるもの、原稿料を取ることの
の義を意味無いもの、公論のもの
の旅費に対する拾貳円と云ふ事
論金を送つてきたる、公論の頁で見ると二十
四頁程のものである。

○金が五年間大隈侯傳記の編纂が
ミ没頭(漸く完成したのを大隈家ひ
きとし紀念会を催した光景の写を
於当日を以て刊行した大隈家の紋が刻さ
れ、当日の晩餐の上出来のものであ

ゟ、こんこを永く家に伝へべきものである（一月廿八日録）

○坊間に二三の図書を購ふ　一月廿九日

一　前賢故實　二十冊

家藏に北書あんなれども、之も別掲の如き
之も善き書にして、一寸も長き
大本也　初版特製の味掬すべし
第八冊　所謂献じもと見へたり
價五十圓

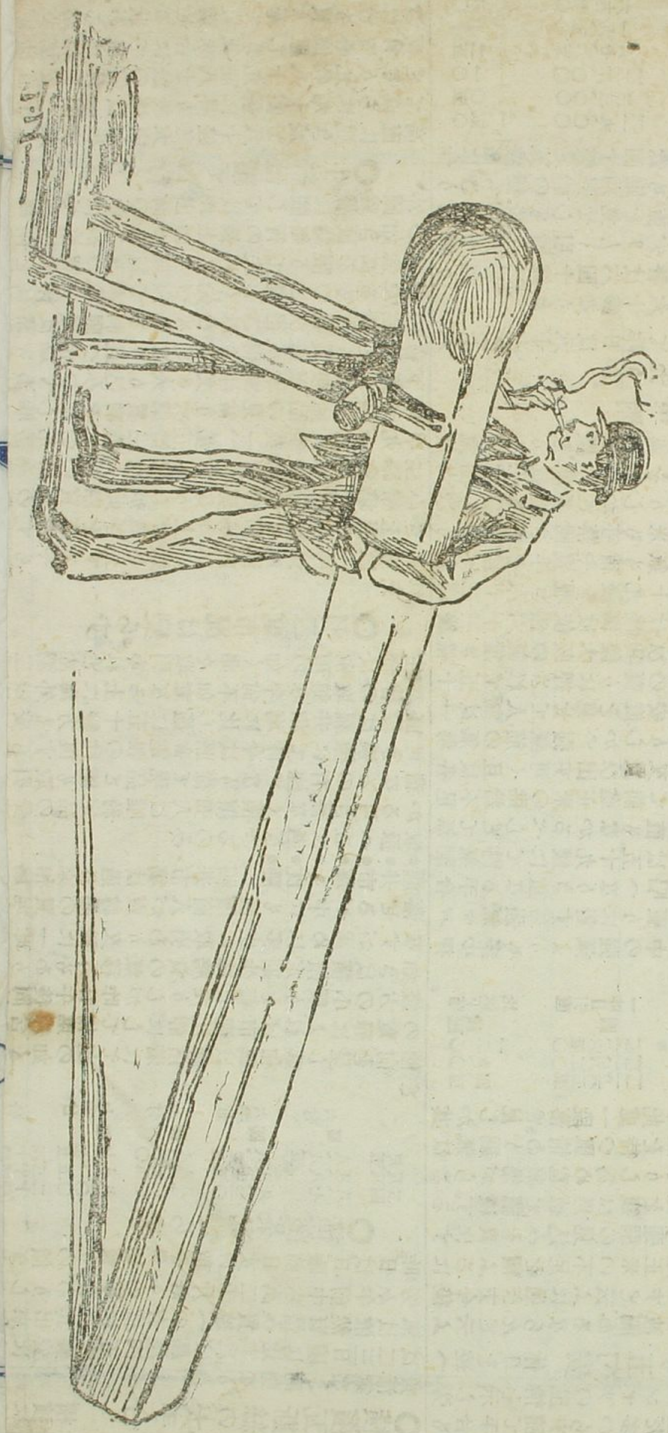
一　花月六面鏡　二冊

十二行

北書は時代屏風の事句集也　書
屋に於ての源氏あり　是者に孔
雀の屏風あり　享保四年の刊り
伝る北書なるべかりし

一　小華面清話　二冊

明の謝在杭の著也　林復齋前
舞藏を養刻したるもの
復齋自の印記を有す　巻首に
本煙の序あり　天保年間の刊行
に係る、北書中にも稀なり、版式宜敷
る因じ、北書内お富のものに雑（一名面



ある学者の一冊を翻訳する例

○故紙を拾ひ左の二枚の新聞切抜を得たり、今より
凡そ二十年前のものと雖も、西洋新聞に掲載し
たるを載せ、以て新聞の名を
示す也

一月三十日

紙の原料は不明瞭でもあるし、私たちの知識の範囲内の紙類の一部分を示すに過ぎない。

足ゆびの数を取る履の先づ三足ずつとして左れば人が一生涯に穿く履の数は牛を殺すこと三千

人生を五十年とみての割合先づうの通り一年に一足づつに大概一足の履を新調する時穿く履の数は牛を殺すこと

○生涯に穿く履の数

五尺方尺の牛皮を積つて之を穿に要し一足の牛皮

○又市中に同書を画り一二を獲たり

二月一日

四冊

肉蒲団

北方の和刻本市中を流し売んとす

宋多に渡りしかと雖、偽物多くして

支那と桂林公義とを許されず今

偶然の事なり北本和刻本とも

の異同あるも別に今は校比の暇

不暇

なしとも

蘿隱美

北方横井也有の詩を集めたるもの也　二冊

也有の和歌の一刻もあれども詩多く久しく
富士とも緑の形容の手も絶へたるも
此年名古屋に於て出版する責任
あるものかの如き手に入ること難し

蘭学栄年引巻　四方切本一冊

北方蘭学 MEDICAL BOOK とある博愛
堂蔵版とあり。文化の年播州石原惟
良の撰ふ所也　三十枚の小冊子なり

十二行

今川瑞とすべきなり

新古花鳥美　二冊

内流十一年金子錦二の編する所
巻首に俳名坂巻又の序あり新古
の数流屋の歌を以て此書金沢
屋の婦人を以て終る。図まも
彩色を施し、第二冊は詩刻を以
すこしも彩色摺也。此数流人今も
紙幾ら程遊難しと云へ
ら賜ら

○次日又一二を得　　二月二日

伽婢子　　土巻本合一冊

寛文六年　鄙の子松雪庵主の
自序を載す　給入色美濃紙
ひこ　　價十二匁

女郎花　　土巻本合一冊

寛保二年　八文字屋自笑共笑
の写人作者としを名を署す、
給入美濃紙にすべて八文字
屋の他本と同式こ　價廿五匁

業平昔物語　　二冊

北本可なり時代あるめ写本なる給
の写しなり甚だよし給も善色伊
勢物語の絵の色うまく古文言
葉物語の全く異也和歌八物語の色う
を引けども各和歌と其のこころ
注し、物語まとめ昔男あり と書き換
そこんも時業平を男と書き換
へ物語の間なるまも似すこれも數
行すること多し、例へば本二表こ
本云の都のことあり英都の年

稀書複製會々報

第五期
第三回

昭和二年一月

第五期第三回配本解説

千代の友鶴　三冊の内　上一冊

（原本　笹野葵園氏藏）

第四期に複製しました『貞徳狂歌集』と同じく最も完全に保存された笹野氏の愛藏本から複製したもので、圖中の人物は『貞徳狂歌集』のそれよりも大きく、菱川師宣の繪本中特にすぐれてゐる一つです。上卷の本文十二丁、但し末丁は裏白です。詳細の解説は次回の紙上に載せます。

猫鼠大友眞鳥　一冊

（原本　水谷不倒氏藏）

本書は近藤助五郎清春の署名ある赤本なり。版元は江戸湯島天神女坂の相模屋なるが開版年月は記せず。様式は五丁より成れる普通の赤本にして、表紙に大形の畫外題を用ふること、既刊の『桃太郎』と異ならざれども、内容は純然たる狂言繪本に清春一流の滑稽味を取入れたるものにて、やゝ撰を殊にせる赤本中の變種なり。其開版は傍證より推して享保十年より同十六年までの間なるべきこと明確なり。案に、原本の淨瑠璃『大内裏大友眞鳥』が操りに初めて興行されしは享保十年九月なり。また卷中俳優に擬したる紋所、三桝に一の字の紋は、市川團藏が市川宗家と確執中に用ひしものなり。宗家と和して後は一の字を去れり。そは享保十六年の冬なりしことは『俳優世々の接木』に見ゆ。

赤本は後の草双紙合卷の前驅にて、江戸の通俗文藝に一道の曙光を投げかけしものなり。赤本は人々周知の如く、二種ありて、共に五丁を以て一冊とし、其式を後の草双紙類に至るまで踏襲せり。右二種の中、小形にて丹表紙を掛けたるものを以て赤本の嚆矢とす。既刊『初春の祝ひ』及び『名人ぞろへ』はそれ

なり。然れども右二書は小形の赤本とはいへども、小形赤本の通有題材たる「化狐」とか、「寶藏し」とか、「鬼遊び」とかを題材とせざる所に特色あり。さて右の小形が擴大されて中形となりたるが普通に謂ふ赤本なり。而して其題材よりして、之を或ひは「昔咄もの」或ひは「金平式の武勇談」或ひは「化物合戰」或ひは「鼠の嫁入」等に分類す。赤本は黑本や青本の如くに妖怪談や合戰物や武勇物を未だ濃厚には取扱はざりき。黑本や青本が是等の題材を取扱ひ居たりし期間は可なり長き年月にして、本書刊行の頃即ち享保の中頃には黑本より一變したる青本卽ち萠黃表紙を掛けたる新裝の物を出せり。既刊『風流鱗魚退治』の如きはそれにして、內容は金平本式の武勇談なり。延寶の赤本發生以後約四五十年間に、赤本より黑本、黑本より青本と漸次に進歩せし玩具的繪本は、今や一轉化して黃表紙の世界に移らんとする機運を釀せしにも拘らず、赤本は其間に介在して尙ほ餘喘を保ち、玩具的繪本の本領を維持し居たりしかど、黑本及び青本の感化影響を免れ得ずして、いつしか其畫面に著しく當時の型を取入れ、內容は彼此殆ど同一にして、たゞ表紙の色彩を異にするに過ぎざるのみとなれり。隨つて三種三樣の特色は之れを認むるに難きものとなりぬ。本來黑本と青本との區別は表紙の色の差違にありき。青表紙の裝幀なるを青本と稱し又新版物ともいへり。これが裝幀を改めて黑表紙となりて再刊されたるを黑本と名づけ、古版物と稱さるゝが例となり、後には表紙の色にて新版と古版とを卜知せり。然るに赤本は之れに反して終始一貫玩具的繪本式の體面を保ちつゝ、享保末には將に廢滅に歸せんとせし殘壘に據りて纔に形骸を存し、淨瑠璃劇を題材とせる狂言繪本として世に行はれ居りしとは、劇の研究上よりも、草双紙の研究上よりも見遁しがたき事實なり。單なる滑稽味を主として卷中の人物を猫又は鼠の顏に描くことをせず、配役の俳優を其紋所にて指示すべく力めたるは、方に胚胎しつゝありし『芝居繪双紙』の暗示とも見るを得んか歟。

凡そ狂言繪本には筋書を主とするものと繪にて筋を直覺せしむるものとの二種あることは、既刊『傾城筑波山』及び『皐需曾我橘』等の解說中に述べおきたる如し。さて元祿より享保の初めまでは概して筋を主とし畫を從としたるなるが、享保の中頃よりは繪畫本位となり、寶曆以後の『芝居繪双紙』に移り行く過渡期を劃せり。本書『猫鼠大友眞鳥』の如きは、畫面を以て筋を知らしむる式に狂言繪本が變遷しつゝありし享保中頃の出版にてもあり、且つ演劇とは因緣深き畫工の筆になるものなれば、尋常一樣の玩具的赤本とは見做すべからざるなり。

本書の題材とされしは淨瑠璃劇『大內裏大友眞鳥』の筋なるが、それを猫と鼠とに當て嵌めて、滑稽化したるにて、近藤清春が慣用手段の戲作なり。『聲曲自在』に收むる『竹本豐竹淨瑠璃譜』の中に近松巢林子の歿年を享保九年十一月廿二日と記したるに續けて「竹田出雲椽近松門左衞門に傳授を請けられしを以て淨瑠璃二三番作られし內に『大內裏大友眞鳥』五段續、享保十巳乙年九月十八日初日、是れ四段兼道の身替り古今の趣向とて大當り、ついで享保十九年甲寅二月朔日」云々とあれば、此淨瑠璃劇は、竹田出雲の作にて、享保十年九月に竹本座の操りに上演せしが其最初の興行なりしが如し。この『淨瑠璃譜』とは、原題を『近事聞書往來』といひ、太田南畝の藏書に係るものにして、貞享に起りて明和に至るまで、凡そ八十年間阪地竹豐二座淨瑠璃の盛衰を列叙せるものといふ附記あり。本書卷中なる俳優の紋所を附しある人物は、いづれも享保年間に活躍せし江戶の俳優なり。其紋所に依りて二三者の名を擧げんに、「丸に二蓋笠」は中島三甫右衞門、「角に二蓋笠」は中島三郎四郎、「三桝に一の字」は前記の市川團藏、「丸に橘」は市村竹之丞、「交叉せる拍葉の下に三巴」は山中平九郎なり。

筆者清春の傳は未詳なり。第四期刊行『道化百人一首』の解說に、式亭三馬が『金の揮』の書入によりて略傳を揭げ置きたり。當時の赤本といへば兒童の玩具なれば、描く者も不用意にさら〳〵と書き流し、觀る者將た意を留めざるが習なれども、本書の如きは清春の最得意の筆とせんも過言にあらじ。彼れは正德より寶曆の初めまでは芝居狂言本、歌舞伎幷に說教座の正本等を描きたりしが、享保度に至りては中村座の畫看板は清春に限りたりとさへ『金の揮』に記さしめたり。按ふに演劇を赤本に取入れたるは、

彼れとして當然のことならん。單に畫そのもののみより見るも、この狂言繪本の筆力は清春の他の版畫のすべてに比して、暢達しをりで、鳥居派のものに對して遜色なく、寧ろ氣が利き過ぎたりとさへ思はるゝ優秀の作なり。當時の狂言繪本の大概は既刊中の『傾城王昭君』及び『竹之丞』の如き鷹揚なる描き振りより漸く『傾城筑波山』の如き細畫に移らんとしつゝありしが、本書はそれらよりも更に一層後期に屬する『芝居繪双紙』の面影を聯想せしむるものなり。

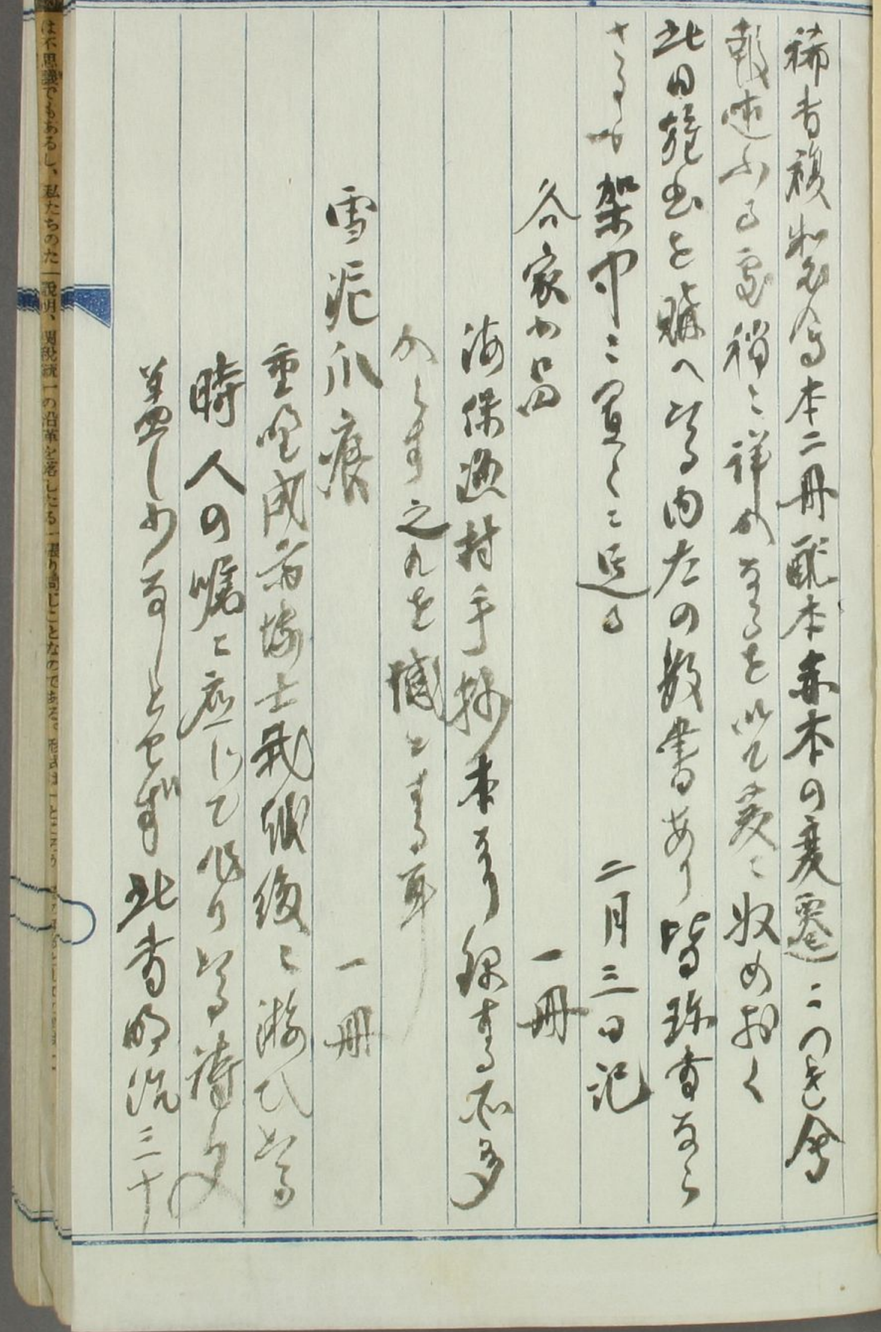
次回刊行豫告

千代の友鶴　菱川師宣著　中一冊　下一冊

金々先生榮花夢　戀川春町畫作

後者はこれで完結しますし、前者はあと一冊となります。第五期に入つてから割合に硬いものや割合に薄いものを出して居ますが、それには事情がございます。創業以來滿八年間何等の汚點をも印せられなかつた本會へ、昨年秋突如一つの奇禍が降つて來ました。第四期第二十三回の配布本として發行しました『倡妃地理記』が當局の忌諱に觸れたのです。あの本は紙數が多く文字が小さくて費用が多くかゝり乍ら、形が小さく繪が少くて見榮えがしませんから、初めは着手を躊躇しましたのですが、既刊の『滸都酒美選』の前綱でもあり、原刻本も稀に見られる所から、遂に複製しました。然るに時恰も井上巽軒博士に係る事件が喧しかつた際であつた爲に、峻嚴なる當局の檢閲を通過する事を得ませんでした。併し本會の主旨が古書保存に在る事、其事業の眞摯着實なる事、複製本の非賣品なる事、既に會員へ配布したる書籍を回收し得ざる事等を辨疏して幸に頒布禁止の厄を免れました。

右の奇禍に遭ひましてから再び覆轍を履まないやうに、成るべく軟派に屬するものを避け如何ばかり嚴密なる檢閲をも通過せんことに努めて居ます。隨つて彫刻を了つたものでも當局者の諒解を得るまで發行を差控へたものが數種あります。又近頃では內務省納本の期日を嚴守する爲に自然紙數の少い本を先にする傾があります。が、數月內には此弱點を調節し得る見込です。



一年の夏、吉田に於て流歌に附し、巻首に日下門の序あり、世に盛に
松彩の歌あり、他人に与えて称とする
ものすくなし、余に於て北者を異人とする
あり、今俗級に北者を得人とする
難し、よろしく架中に存すべし

一梅田義華詞刻　写本　一冊

梅田義華、麦に際し、当時歌筵を
きわめ出かえん等を集めたる
ものなり、詞を備へ、書を同くば
みだらも出来ると、たのもあるべし

一清岡翁全集　四冊

元の倪雲林の集なるべしと、支那に版
刻さる雲林和尚画界に於て絶さる
めずらしき書の集の海布するものなり
此集雲林の詩文書画撰を収むる
の外、雲林の行状、雲林交友の序
跋をもくく収す、赤摺もあり、支那
の俗出版の如く表千部を紅摺
するを例とす、これも其例也

三
[illegible]は不思議でもあるし、私たちのた[illegible]
[illegible]月、[illegible]一の沿革を考したもの[illegible]

○北一輝の著書に於かしかりし、音義の誤れる
思潮を博き文を心のままに、春秋文義に頼まれて、漢文
と文義との間を埋しようとし、青山社に従ふも紙と墨
すること出来ざるを苦いたりしが、「漢文と紙と墨」
あの稿を書まんべ才二の隠遁生活に入り漢文
学流のうち、隠者の者の稿を頼まること数多
多、才二の隠遁生活に入り漢文の流しも書きれ
らるるに拘らず、元来自分隠遁の稿を
優めるの一法か、
○余が『政治原論』を東京の学校に流しなる
稿をあつめて一冊とし、『東洋経済』に居る
年出版しけるも、家義に中北書店にて刊行

十二行

しくも思いさりしか、此の書は二部有しお
ると聞き、一部を譲り受けの如く、流れに乗り
の翌日まで出き懐かしみあり
○前の家郷の玩具を感出現し昔の思出を心に、数
を集まんば百二三十あり、玩具をさと集めた
るものあるさんば、地方の特徴ある有名の玩具
は多く値いらず、偶こもんの者は珠玉の
回者を過ぎ、其の清の如き、色地の玩具を
ひさく家あり、立寄りて、あの彼の人を捜すんば
指の動くものあり、十数点購ひ、お悔くる、鳥取の
流し雛、肥後木の芽の木芽猿、大阪の十日戎の福人
千早の千早人形、大坂業平寺のひな市、京都が

其重なることである、当法王のおもちゃ番付を作りて
ある、其番付も婚ひ入る
○本年家宅を改造せんとして家産の図書を売り
其の収入と充てんとす、既に其の意を決す、図書を婚入
するの常習を癖すべきに似たり、而して之れを度し
得ず、毎日日々婚入をつとめて自から笑ふに忍
びるとも、既のみも静かなる日あらん、図書の婚入は年使家
を推移する一法なり、図書を過ることを癖すれば
愛と日々の散策止まず散策を癖すれば使家
に影響あることを言ふ自まずも可し、図書の婚
入終に癖すべきなるべし且つ書籍を買ふも策
と保健の為めに又要なるべし、書籍を年書

十二行

に取て一種の学校なり、書籍に就て未見の書を知
るは日々のなり、如何ぞ敢て我れと教育あるべし其
庭頭にある図書は自身を等に教育、敢て珍
書と限らず集と、この図書の存在を知る
のみならず好書家の愛くべき大切なる教育なり我
れが日々多の智識を得るは、書籍を治ふ
が故也、図書過り為を癖すべきや二月
書記
○二月六日 晴 ○今日を見かくく散策浅草
の中之世の玩具店に立寄り種々選
る、当時玩具流行家が必ず一番と云ふ名品現
具を婚へ、皆活動のうるる意の反しの物

めでたさを也、其日の出方

鶏押　大垣　大弟子

佐子森牛　金津

豆三番叟　和歌山

赤地牛馬　大阪

寶の入船　大阪戎神社

道引犬　高野山

ゆとと床　春日

狐と鼠　江戸

品川宿　光上一番に入る

枯工夫

蛍芝神の九月十五　「つき芝」新

東照宮の雛一双　ひやう一木形の雛　京都

産業細工組合双を始め、陶器、本日至
木目家庭玩具目録を出る、既数約百七十也二
月山の記　北海道を考し民族学的研究者の玩具を考へる人も多くなりし今を伊勢
いさぐ

元禄吹のみつ泛作手箱二個あるとのこと（仏壇の
もの）人形玩具を交ぜるの例あるつき）六品
を陶器にて元入る、他に大きな一函小さな支那製
玩具湯つ、十数の類の結果如斯
女性陶器しなもの家毎年上に雛を飾ると
例とす、本年のひなかざりとして美麗なる一排
して目録中のものを掲げみる陳列し一生面を開く
人数

十二行

なるべく玩具に関係し、偶然長の目に字つれ
仏画の前項目録の中に入つた　豆本若集の目録中に入つた
純玩具にいくらかあるが「遠民物語」や「源氏かるた」一百
人一首のかるた、雛本目録曲百番、絵巻錦絵（廣
重東海道）等魔美人絵）などの類の皆玩具に属
するものゆえ、安政年中玩具に属
でなる、目録と一緒なる七十数（余と挙げ得れ
の北斎の絵かるた
為一事を附記す、小西骨董の品何の品につ
ゆ多のものなる目録に収め得さりしもの
漸やく数点、外合約十数あり、骨董部数
九点の内の玩具としても可な

ることのように、その金を[illegible]黄銅の観音像の
花心に、銀製の蓮の花瓶一双、製作の花瓶二対
[illegible]と精巧に、木彫仏像時代あるように、菜
師寺の古板を以て[illegible]
その他の生花の撥鉢、時代ある織物
馬鐸、[illegible]
八時と二分と定め

二月七日記

○大西天皇御崩御後、今日四十五日目にて大葬の儀の
行はるる日也。御儀は午前八時三十分にて如意輪
御六時十分にて[illegible]
内に[illegible]
[illegible]

十二行

[illegible]御先列の[illegible]
車にて御陵の墓所に向ひたり。御着[illegible]
時四十五分と[illegible]
[illegible]布恩典に浴する[illegible]二十[illegible]人、尚内帑[illegible]四十[illegible]
[illegible]を拔極金に[illegible]
[illegible]音曲を停止[illegible]
[illegible]飾は[illegible]冬[illegible]成り、侵幕を[illegible]
[illegible]を焚く等[illegible]式に[illegible]
[illegible]今[illegible]の三回[illegible]
[illegible]時は京都の[illegible]
[illegible]式を[illegible]
[illegible]

象石諸侯を表し、従来御式に事寄て行のなど
と御の後に京都に御流を為すなるが故に一日中御
埠幕を張り得さりしが、此度を御時幕
東京附り」に御流を新たなるが為て盛に参列
次の金子ことの人全く微官の奉仕也
此度を物にうじオを利用して御幕列御旅
の有様を放天に向ても報することを許さんなる
のみならず御幕列の音楽輦車の軌言を
うじオは入ること許さんなるが為なるのみ
参列の思あらしもて不幸なるうじオ
全く此夜に物と不自由なる為に
御行進の御事を耳音、自しなる、元文化の

十二行

物とこのべき数、六時の）きょう過て奏楽の彩少
こえ輦車の哀音ホ少こ聞、永久と遠幸なる
しまうなる御龍と思へば、まるで断腸の思ひなり
大正天皇は在位僅こまで十五年、其の迫幸を癒
疾患と悩まるる、春秋の富ませられし、
まる不幸なる御軍人命也、但此陛下在世中
なる政務を摂せられ、東宮春秋盛なる富まる
もまるに聴ひこ海まるもまるん、殊に政務と中絶
断も続まるまるに、何の仕合まれ幸中の
幸と申すのみなり、

二月吉記

此日御行列一里まるこなる、沿道の参拝者百五
十萬人、数千戒厳を突破も負傷しなるもの

は不思議でもおるし、私たちのた
説明・現段階一の沿革を若しとも一基り尚じことなのである。形式は一ところが、

知らぬらしかつた。私は偶然にも彼から「牧沢信吉」の消息を聞くことが出来たのであつた。

彼の言葉によると牧沢信吉は今、病を養ふて郷里に帰つてゐる、牧沢氏の病気は肺病だとも言はれてゐるし、また梅毒性の狂気だと言ふものもある。その病気の種類はいづれうわさだからどちらとも信用は出来ないけれども、とゝかくも牧沢氏が病気を郷里に静養してゐることは事実で、牧沢氏の慕美者であつた彼がまだ学生時代に一度牧沢氏を訪問した事があつたが、その時には残念にも牧沢氏はもう帰郷したばかりの後であつた。牧沢夫人がみづから出て来て夫の帰郷の話を彼に聞かせた。その後、一度牧沢氏の家のあたりを通りかかつたので、注意をしてみると、その門にはもう牧沢氏の表札は無かつた。いつか訪問した折にさういふ話もあつたし、多分、夫人も一しよに郷里へ帰つてゐるのであらうと思ふ……

かう話してから彼は、あの傑出した作家が半ばで仕事をやめなければならなくなつた事を痛惜し、またなぜそれほどの作家の作品を私たちが一つも読んでゐないといふのは不思議でもあるし、私たちのた

問沢諸言問

下村博士の財政読本（四）

太田正孝

著者は、財政に経験のあるものをもらさないやうに苦心してゐる。経費の各項目において、国家事業の現状について、問題として捕へてゐないものがない。租税の体系と、各種の費目についてその説明と批判とを、落ちなく掲げてゐる。専売と官業、公債などについても、またしかり。とくに私たちが、よく聞かれたと思ふのは、地方財政のことである。六大都市の財政を説くところ、地方財政の根源として、市営貯蓄銀行を指示するところ、自治の根本的革新をさけぶところ、模範町村を例示するところ、みなその用意と着眼とを敬服推奨するにはゞからない。同時に、著者の親意も察せられる。

私は、この書を出来るだけ、委しく見たつもりである。よい本と信ずる。女学にとぼしい自分としては、出来るだけ、ほめたつもりである。——同時に、よい本であるだけに、かうしたならばと思ふ点がないでもない。

傭金に対する説明が不完全ではないかと思はれること、経費と公債との関係の実際問題としての説明、租税統一の沿革を落したるそんなことよりも、もう少し委しく書かれたならば、と想ふ。著者が永き実際上の経験と豊富なる材料をもつて

とまで申すのは、拙戸迄の者を、いやがうへにも完全にしたらばと思ふからである。——私の遠慮ない言葉は、勘弁していたゞけることゝ信ずる。

× ×

つぎは、大隈侯八十五年史にかゝる。

韻文で書き給へ

横光氏の短篇集を読む

佐近益栄

新感覚派の文学もまた一種の表現派らしい。そこには主観の尊重が感じられる。僕は表現派に対してもさう思つてゐるのだが、散文の形式をひつこめて韻文でやつたらどうだらうか。すくなくとも自然主義的な新理想主義的な筆致をもつてしては駄目だ。僕は嘗て表現派の芝居は観客が解剖つて見なければ美の味に徹することは出来まいといつたが、今でもやはりさう思つてゐる。浪漫的な戯曲なども恋人と手を握り合つて見物すると、より感奮するだらうと思つてゐる。このやうなことを僕が考へるのが、そも〳〵現今の表現主義には何物かが不足してゐるからで、ひいては新感覚派を韻文の形式でいつたならばと考へるのも矢張り同じことなのである。形式は

とは卓見であることを否定出来ないが、氏はそのさく覚も視覚的さく覚に重点をおいてゐるのはやゝ偏狭である。氏が視覚的さく覚に重きをおいた結果、印象主義に近い色調を帯びてもゐるが、しかし、そこには印象主義の容器にはいりきらない、主観の強烈さがある。由来印象主義は主観の強烈を看板にしてゐるにはゐるけれども。そこで僕は思ふのだ、横光氏は、今までの文体を破壊して、より感覚的にしなければならぬ。普通に近い文体でそのより強烈な主観が出るものと思つてはいけないのである。それにはまた、理性的な身につかない変なものを棄てゝも、強烈な主観を本当にもつことも、更に根本的な急務であるが。ところが、その手段としてゐる未

現代へも効く
動脈血壓
すでに罹つた早く
そして腦溢血
すでに腦充血
早く良く
腦神經衰
早く治
そして慢性の
早く
ふしぎなる
特種高
藥名
老衰早老病の動
男女とも四十歳以上に多く
壓力亢進病の容態は、
耳鳴がする、めまいがする、
こる、のぼせ易い、どうき息切
頭に吊る、所が重い、記憶が鈍
へる、感情が興奮する、不眠と

十二行

(郵物認可)

必ず指名されると思はれたから、ハテ、どもどして私は答へた——

「いや、その名前ぐらゐは、以前に聞いたこともあるのですが、つ

霊肉の限界（三）

（動物で逃ふ脳髄の発達）

東京帝国大学（精神病学）教授
医学博士　三宅鉱一氏談

▽この他まだいろ〳〵の沢山な問題も起つて来るが、差当り先づこの三つの問題について述べて見る事にするが、それを話すには、一体このし脳性脳炎が起つて来るには、先づ何処が先に犯されるか、脳の中で一番先に、何処が重要な変化を起すかといふ事を、調べて見る必要がある。

▽この事を調べるには、先づ我々の脳といふものについて、大体を知つておかなければならんが、我々の脳には、大脳と小脳とがあつて、その大脳の一番上の前の方には、一番広い場所を占めて、いわゆる前脳といふところがある。こゝでは脳の廻轉がある所で、人間においては、最も発達して居る所である。それから後ろの方、脊髄に近い所に延髄（後脳または続脳ともいふ）といふところがあつて、こゝは主として生活現象に携さはる中枢のある処で、たとへば呼吸や、心臓の運動、眠管運動、または消化系統の運動、すべてそれ等の不随意生活作用の運動を司どる中枢である。即ちこゝは我々の生活する事、自己保存といふ事の中枢なのであるが、この延髄と前脳との間に中脳といふ所があつて、この中脳と前脳との間に、更に間脳といふ所がある。

▽動物の種類によつて、その脳髄の発達は、決して人間と同じやうな程度に発達して居るものではない。殊にトカゲ、ヤモリ、あるひはまた動物でももつと下等なものに至つては、その脳髄の発達程度は、人間とはいろ〳〵違ふのである。例へば鳥のやうなものになると、間脳の辺が凹合に能く発達して居るものであり、ほ乳類の上等な動物になると、始めて前脳が非常に発達して来るのであつて、特に人間になると、前脳が非常に発達して来る事は前にも述べた如くである。

▽なぜさうなつて居るかといふと、およそ一般の生物といふものは、本能的に自分のからだを、生活させてゆくといふ事を生存の条件として居るものであるが、それにはしかし間脳その他の第二次的の脳で以て、立派に働くもので、本能的に、自分の生活をつゞけ、また子孫をつくつて、その種族を維持してゆくといふ事は、それだけで出来るのである。故に若し生物界を広く考へれば、人はもと〳〵一小部分であり全動物共通に、単に生存して行くといふだけならば、これらの第二次的の脳の発達だけでも、更に差支は無いのである。

▽この事を調べるには、先づ一例をあげたまでのことだ。傾光利一氏が主観的表現の方法としてさく覚に着目してゐるらしいことの不明瞭な言葉を用ゐることが新感覚だといふならば、それは馬鹿々々しい。たとへば一七ページに「妻の健康な時に彼女から與へられた自分の鉄拓の苦しみよりも」は二五二ページの「濃霧は水面にまとまりながらたにからたにに蛇行した」と共にそれだけでは藪蛇なだけである。正確でないだけである。また、五ページの「子供が二人湯気の立つたいもを持つて紙屑のやうに座つてゐた」といふのは病室の窓先からの展望であるが、主人公がよほどよい望遠鏡でもも見ない限り湯気が見えるなどは、笑話だらう。作家として立つ以上いますこし神経が鈍くない方がよいと思ふ。しかし過渡期としてはそれぐらゐなことは当然なことだらう、未成品である方がむしろたのもしいのだ。

何にしても、氏は將来をまつべき人で、現在としては未成品だ。

以上が、傾光利一氏の新作集「春は馬車に乗つて」の感想感である。この書には、「蛾はどこにでもゐる」「鶏」「ナポレオンと田虫」等十一篇がおさめてある。（価一円八十錢芝アタゴ下町政法社）

中風ちりきの

これは脳溢血の発病後に出る半身へ、胃腸不自由、手足がしびく、のぼせ、肩がこり、よだれを流し、耳鳴が襲へ、新陳代謝が衰へ、動不眠、皮膚が乾燥し易い、早く海藻水を服用せよ

動脈硬化症に効ある即ち耳鳴、のぼせ、こり、頭痛、不眠又は多眠なく、手足が冷え全身がだるく皮膚乾燥、性慾減退、精液早

霊肉の限界

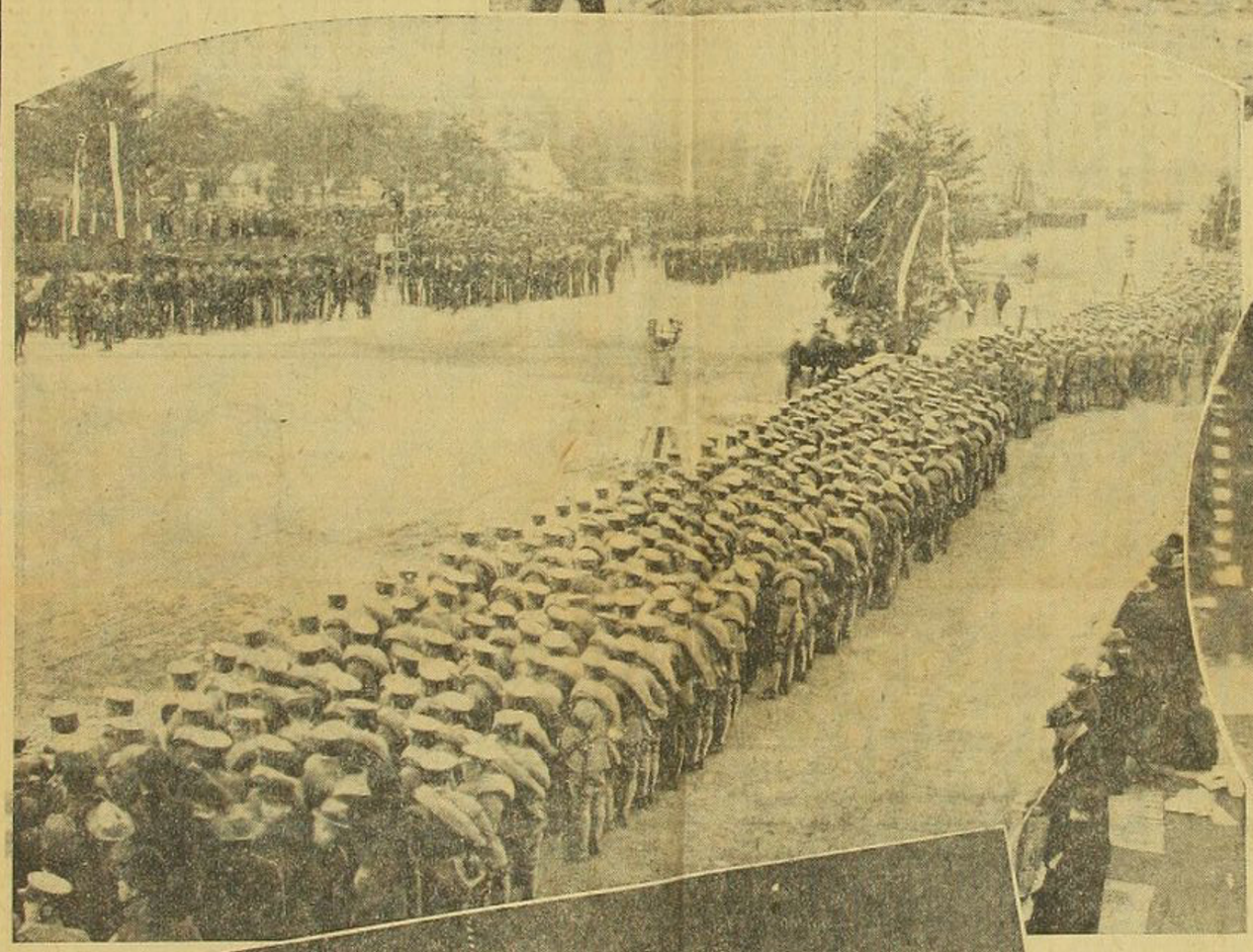
うゝよい歯磨

▽一　新聞紙
▽二　新聞紙
▽三　新聞紙

本の内容でもわかる

御大葬謹写画報

上――御発引の準備御輦車御車寄に向ふ（昨日午後五時撮写）中左――御発引迫つた宮城前　丸――御名代秩父宮殿下　下右――奉送の大官（前から宇垣、幣原、江木、岸岡、町田、藤沢の各大臣と斎藤朝鮮総督）下左――捧持の鼓一対……と日月旗捧持者



登録商標

風味肋のは　そ時祛門龍散全き

○拾写し数葉を一二の書を得て海る（二月九日）

一 北越風土記　　五冊

北越文政年間秋郷人福保恭和の
編著に係る、卿子に有名の書なり
んと云ふべきなり余が架中
未だ其の分りしを求めて手に
入る、北越の土誌中の佳書也

一 墨妙亭叢

かの幾年数百の業を刻したるあり
巻尾に李廣の跋あり郭沫若を
〜千〜八〜

十二行

也日本法帖の新比帖を久くすすめ

一 通用古方詩括　　横大本 一冊

元医家の古方を詩すれば記憶に便
しけるものなり本巻を和歌するに
つと同巧也各詩に詳注あり蒐
治三年開板医の者つに尾す
る書なんど詩するなりけり玩ぶ
べき也

○早稲田大学の歴史的図書を早稲田学報に
掲載を始めて九回に及び九月に至つて、第十回を
私学の注意雖を書き、注意家の苦心や基金

募集の事歴やらを紀して長文となる為次きまい
現工学部の設置其次まい教味方面は早
稲田其次まい早稲田の附属事業者其次まる
早稲田の土地経歴などを書き十五回で一先づ
筆を閉じ筆代、あとの中腹案を録つて為
ふ方に腹案の大概を述べんべ

現工科の設置

元来この問題の基礎を果すべき、早大
ハこれまで更に一生面をひらく
大学としての面目上地科をうるべきなり
勿論時勢之んを要求す
医科と何んを先にするかもの論もあるし

が第一に現工を急ぎ
地の開拓準備の為めの為めと余を四原を
あとの本根の開地に就き三人手分
けをして設計書を作りなり
現工科の設置の事大綱に定し三番目の
恩師をなく
先の恩師教授を建設し各科の研究
室を各科に均霑す、勿論三番
目の恩を心に恩を
用ひて遠案費不足を生じ、又建物
の一部に遠加工事を始つて出来
実験室四部校を始へ現工室
事務室を備し、第二の府となり

皇室の御下賜を基とし基金募集に
着手
教授を始ることの困難は世間の
の同意を得ること、世間から
援助を得ること、世間から
資格を遠ざけられ洋行をしめること
又の者を本校へ移すこと
森村市左衛門氏の寄附し
建設費の費用
光の機械電気科の設置
一年四月に於ける四十
次で四十二年二月採鑛学科建築学科の
設置をひらく

大正二年十月創立三十年紀念に校舎を奉
げ見習工科設備の拡張をなす
学科の全部を一ヶ所に集め他設備の
完成迄八九年を要す
現工科を廃する意味の伝授数は三千七百
となる
創業の際努力せし高橋先生は一
世間の人一般の尊敬
啓蒙の論説を
物語る
四十四年三月に工手学校を建つ
同年四月恩賜紀念館の建築成る

大正九年大学令に依り現工科を現工学部と改称す

早稲田の味方面

銅像建設

作庭

恩師紀念碑

東京出張

国旗掲揚

大ポルト

関宝西田

優勝盃

永楽倶乎部

大隈侯旧邸

式典参列

校旗校歌

河村幸大郎

不忘帳

早稲田八景

土地經營

初め寸尺の地も有ましし畑田は今は大地主
になる

初め校名を畑田大学と改称する時は附近
の土地を無償にて買収しようけん心をもつて
いたが第七つ学校が果
して地價が昂騰して買入ることがひどく困
難となつた

大隈家右衛門の学校敷地七坪の
有と云はれたが、維後のものである
考へたるもよろしく近こ附近の土地が得
られる

運動場とうつたるもみる島の四方農家の不
みつて有つた所をんが都合よく買入れ所の
も面白い條件でもあつたのが学校の位置
である

学校は基金を得たから表だく土地を買
入れ、まんがれと地價が昂つた有利に賣
却さん任務を助けたことが感じある
高等学校の用地でも基金のお蔭
を所有したのである
輕井澤の一百四十坪の書附一切乗千坪
の土地がある
郊外と若干の不有地がある

西郷(隆盛)侯爵家は保公と共に不
新[illegible]職員が早稲田の地名の由来
[illegible]三萬坪の土地もある
大隈家田宅の敷地も一萬坪以上ある
から、初め八寸の地もあれこそうしたことが
今は大地主になることを思ふと早大も
大きくなったものである。
[illegible]田住宅をやうしたことも
[illegible]欲をゆるまるまでもうちきうつた
[illegible]校で現在不有の土地を出来[illegible]千坪を
[illegible]

十二行

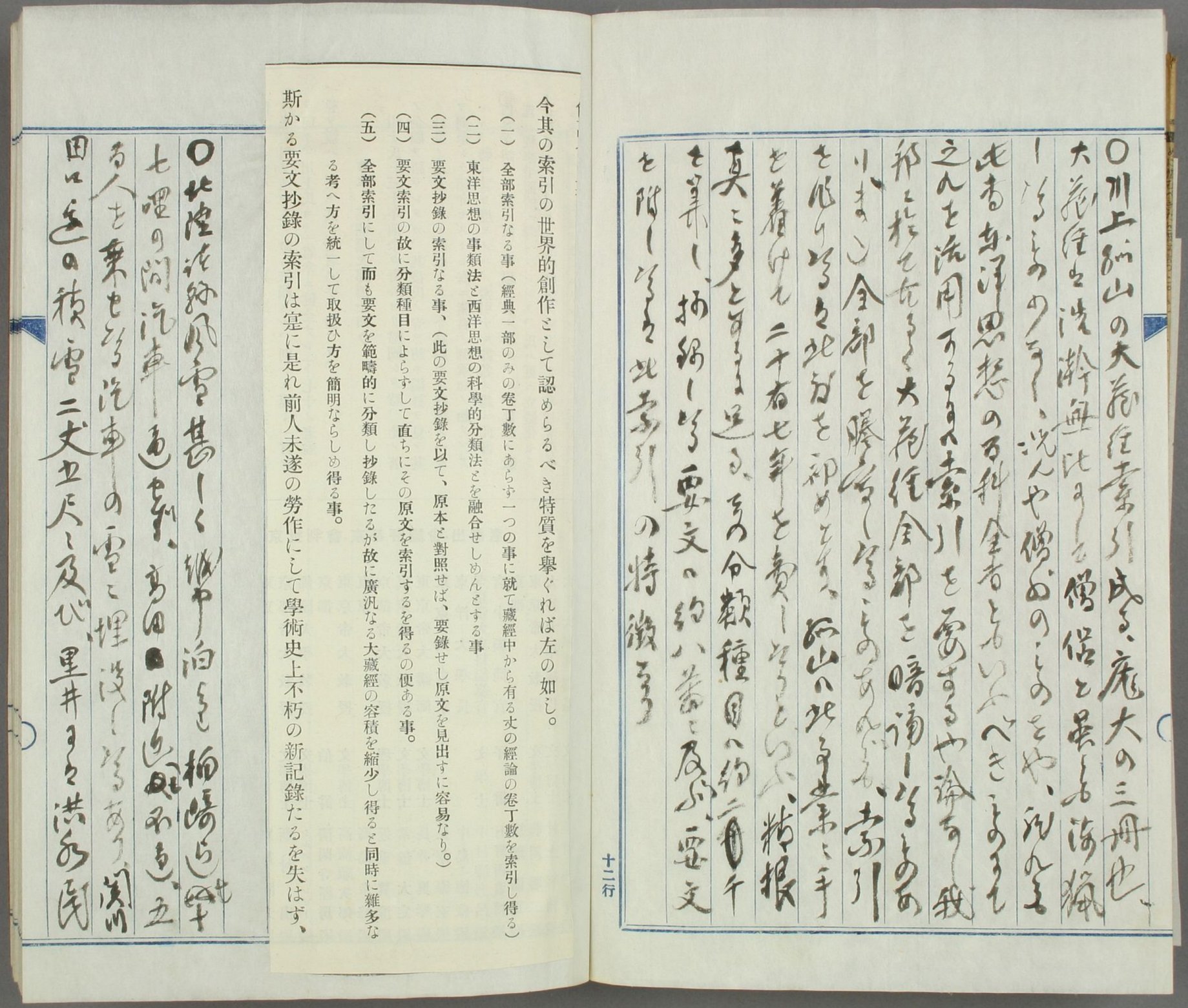
早稲田の創業

十二行

明治四十年一月四日の印刷会社起る
元来先きの印刷会社は明治三十四年
時分に出版部物上に協賛するを初め
とす
生命の方はのしく早かりし。
第一の時分は株は為替つ印刷も初め株の
工場事業多かりしこのしく株式会社が
が生じ一時困難を来たせり、株主募集と昔
が析き
最初商号和田を合社の事務と擬したる
商号の見込なりしを社長は
雪松と称し鳥井と一緒に事務をしめるか為

大学井目に当るをもって一年間の学費を
減ぜられ候ゆえ久しく衛に帰ること能わず業を廃
滅亡のあるを惜しき工藤貫兎の面に帰らしめ
学費減ぜられ候ゆえ拙者江戸のあらんこれ以上大に
編成あるべき者数名を申し出でしめ
度のみ相渡候ゆえ厚く御礼
奉申上候
印刷会社の例を倣い往来出版部
の印刷会部を引受候社是
を設し一ヶ所の注文をあつ積分以上引受
けさるべしとの事を以て急ぎ書文をもって
印刷会社の例規を申義なりとさるべし

十二番



今其の索引の世界的創作として認めらるべき特質を擧ぐれば左の如し。

（一）全部索引なる事（經典一部のみの卷丁數にあらず一つの事に就て藏經中から有る丈の經論の卷丁數を索引し得る）

（二）東洋思想の事類法と西洋思想の科學的分類法とを融合せしめんとする事

（三）要文抄錄の索引なる事、（此の要文抄錄を以て、原本と對照せば、要錄せし原文を見出すに容易なり。）

（四）要文索引の故に分類種目によらずして直ちにその原文を索引するを得るの便ある事。

（五）全部索引にして而も要文を範疇的に分類し抄錄したるが故に廣汎なる大藏經の容積を縮少し得ると同時に雜多なる考へ方を統一して取扱ひ方を簡明ならしめ得る事。

斯かる要文抄錄の索引は寔に是れ前人未遂の勞作にして學術史上不朽の新記錄たるを失はず、

家をひとし、校舎民家の仆るこゝ多し相四種く吹雪
あ續くのみなりまた四雪崩起りて危險
甚しきこと故に人夫悉く暮りを成す軍隊
出動するも格別効なし奏功(交通)杜絶の為め
糧食に欠乏を生じつゝあり斯大雪は天保以来
初めてといふ今が牡年の頃高田と宮しても雪の
如き大雪なりしも稀なる今回の如き甚きあり
ず雪中関山越川の雪を見ること二丈五尺とぞ
の雪は如何程なるや大雪のあるを
地震なるも甚しきこと多し満洲数の吹雪続
きなれば多くの搭乗を起さんも知れず上級人の
同思ひ考らる

二月十一日記

○親山大親を拝ひし時の間も漸く出来
上つとこんを早速国者に送り
度なんと仕する二月あるとあり右二
回数の者を越すなれば十分新長崎でハ
なをひとく芸 ゝ
ゝ二の数かゝ新るが近ひ来たの近こゝと親
山大親の面新の間数と分る
も受けきゝと言つ切つ
の者と 奥比ゝ拝
千三百余円とし
親しても置いとが紙代としてハ実と高の
ひあるが 日本の紙史
の生前のこの

[illegible]ものとも云へんなれども、画料が要
[illegible]ものとなれば紙代の幸[illegible]の生来うゐてもの
が学の技とし二書[illegible]の家所の[illegible]を生れ
受けたい何とぞ義[illegible]二伯を校[illegible]と
推薦するの由の[illegible]が[illegible]ある、然るに画料を
[illegible]幕[illegible]ん校[illegible]とる[illegible]貧[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]人校に[illegible]敬[illegible]
文の[illegible]校[illegible]と推[illegible]維[illegible]
[illegible]ハ[illegible]が無代[illegible]
[illegible]出し[illegible]ことは前年[illegible]村清[illegible]が無代ひ者い
[illegible]没清の[illegible]ん思[illegible]と[illegible]
[illegible]が、[illegible]村[illegible]を校[illegible]

十二行

くることなれば川村をも[illegible]函館
[illegible]同[illegible]と[illegible]
私の注意[illegible]

二月十雪記

右終[illegible]川村清[illegible]が改[illegible]
[illegible]ことを知り[illegible]函[illegible]
のい実[illegible]が[illegible]一[illegible]を記し[illegible]
[illegible]に千[illegible]代の[illegible]金[illegible]代千[illegible]
料を[illegible]ハとし[illegible]ハ千[illegible]以上を[illegible]
とする

○昨日教[illegible]中左の二書を[illegible]（二月十[illegible]）

腹[illegible]師[illegible]

今一冊

うろこかと感ぜられ、黄表紙上下二巻
幸に慈義を存ず、著者の名を闕
けども、文化元年表に載せるるあれば、
恋川春町の作にして、時代考証
類に属す

一 金雪海陵玉荒淫 二

京本通俗小説第廿一巻

此書金主亮荒淫のさまを叙す、偶裏
の故を以て刊行せざるべし、今は支那
伝しても稀なり、海陵王の淫暴
言語に絶す、而して其の実い富と

あるべし、まさに一の金史伝記列傳記歴史
諸傷と合すと刊者の誤なるべし、しかる
上海に於て活字を以て出版す、閑書
の内最も奇の按ずるべきもの

○此等郷土玩具と漸次に趣味を感じ市中散
策の打消と玩具屋をのぞく、今人のものあ
ば嬉しきことなり、撰しもうぶる地方玩具は
さく、都会化せざるこの多し、西洋玩具なもの
多し、此の日につきて婚ひ得ざるべくして、京都
紫衣御工スキー人形洋風なる高道具の也
工春の駿牛、茶津の土産も香いづくにも

の地方色を有す、丹波の俵頁人形、浅草伊勢
油、また蒔絵、こんぺいとう、蒔絵、こんぺいとう、
細工トンダリ、八ツ手タリ、こんぺいとう、浅
草鉄砲、とても名のあるもの、滑稽味のある
この三種を蒔絵、風鈴のエレリエヨンヤ
此この毎るものなり。此今雛の黄出し、冬花と
あり、雛に附属の品、また浅草伊勢、動滑
なるものも木製木地拵、仕絵ある貝殻
品一双、并に黄楊の三一の櫛、歯ある出まて櫛
巻也

二月十七日

○こやし本一にコンニヤク本といふ、一時の戯作也、此者
絵のあるまあ、而こも色素俵歯ある昂り、動

れんハ一冊五七回の後あり、殊に稲荷と云ふ俵
ハ金を高めし、其の所謂る稲なるこあり、実ハ
愚俗云ふ、遍路なるあり、高ある多く行れす、
つも乞食なるこあるもの、乞也、また仏
稲荷なるあ、あるこ多くの後を附するも愚なる
をまた婦人徒も金を愚と謂ハさるを得
ず、黄表紙なるもの、絵なるもの、後位あるあ
あるこ多くも指を深めさるこあるあ、こやし
もも婦人ことも、また人ハ欲せさる也
○江戸方面、らしの掛指と云ふし、某市地
こんこ氣つき、江戸の士人ハ金を惜むとこ云ふ
敗毒のあるこあるもも、騰写するハ金を惜む

光陰を惜まざるべからざるを、説き、其（仏）教を以て人の生身を
こまやかにす、人の苦数等身の香を焚くを奨
励すこの薫香を焚くべき所以なるべし
時代なる勝宮を以て講堂の一手段なり
なることあり、光秀もまた人の尤なるものあるべし而
して人の尤なるものか、
○又市中の香舗を漁り一二の秘書を得たり

一 絵入さうし小式部　二冊
右の子宮本別帖とじ小形本なるも
絵も巧、巻尾に「安政初年書」と

あり、相の若と入れあり、注本也、價四十
四、

一 千字訓 童蒙行　一冊
北斎翁千字文に「百文字訓」と訓
童蒙行」とあり、北斎名の明らかなる所以南岳
懶庵禄の若年、像海禄の
の證釋集詳也、文化六年の序
跋あり

一 弥荘言樂尾本説　二冊
三宝丁春馬　少吉　國貞の絵を

かく、樂屋の大小道具の種なのかし
劇中に興味あるものとす

二月十九日

十二行

十二行

八重山日報所掲

春城隨筆を讀む

（上）三坪園主人

◆相山秋浦氏の手紙に『春城隨筆』と云ふ本が出た一冊の凝らないなか〳〵面白いものだ吾々仲間に勧めて賜ふことにした値段は是れ〳〵だ何うだ一册送らうかとの意味である

◆實は其時は已に『春城隨筆』の四分の一ほど讀みかけて全部に油が乘つて來て居る特分で面つたか讀び者に與へても喜ぶ『春城隨筆』なら喜向き殖民地向きだが一枚ら朝鮮に居る田舎者は未だこんな書籍が出版されても知るまい傾か讀んで見てなんだこんな遠邊北な類切こと知らせてやるぞと云ふやう輕侮の感に觸れぬでも無かつたのである夫れで

◆秋浦氏に賛成しては斯く〳〵で已に購入濟の旨を返事しようかと思つたが同氏も餘程興に入つて彼の世話ずきな何事も仔細な緻密な性分と來ては一人で讀んで獨つて居られず同類を搔き集め態々朝鮮くんだり恐らく吾輩一人の所に知らせて呉れたに相違ない

◆書籍の掘出しものには驚かぬ秋浦氏が『春城隨筆』を見て驚いたのは今日に入つたであらうさそうして佶蒼蒼たる殖民地に在る吾輩の善良を培ふ可く世間放れの境遇を嘗めつゝ興へようとの情味たるや

◆是非一本を送つて頂きたいと返事を出した後で今度は又考へたのは之を雖に贈らうか切てなか〳〵人選に困る背皮金文字入りのきら隨筆式に出來て居る體の格好頭の秀工合、强度の近眼鏡、座談に長じ凝り性で世話好き、書をかいても既に一家を成して居る洗して唐へとまくし立た

◆生命保險の募集員にでも話かけられたやうに流石の草汀も啞然として聞いてゐる春城隨筆を讀んだホヤ〳〵の新智者には全くアテられたに違ひない

◆實は斯く〳〵隨樣な譯のものであるから今讀いた詩りだから之を贈るのだ内容は隨樣な書き振りの長いのも短いのもあり一切合切讀み切りで利息の勘定をする合暇に讀むのに以てこい全く清涼劑だ佛し仁丹やカオールとは違ふ兎も角讀んで見たまへ

◆元田春城翁夫自身の風貌が既に

春城隨筆を讀む

（下）三坪園主人

◆新刊書に接したときの心持は先づ一度中央所を開いて見る次に表紙、裏紙、見出し、目次、それだけで一瞥代せて仕まうものゝ、當てもなく所々拾ひ讀みをして見た後圖書館寄贈の分、古帳面同居格と分類することもある之が又一種の樂みである

◆所が初から讀みたいと念願の書籍が手に入つた時は中々そんな生まやさしい覺悟でない、やゝ暫くは書物を凝視した後戯々竟々として表紙を開く次に一枚々々に捲つて行く勿論讀むのではない看るのである之は日本の書籍に限られて居る支那や西洋の出版物は更らにそんな興味は起らぬ

◆内容を觀るのと讀むのと二た通りある、仔細に觀る時何んとも云へぬ感興が起る看る中にも興に入つてつい見出し小見出しを讀むことがあるが之はほんの偶々である

◆『春城隨筆』は趣味や史傳ものはさうでもないが隨筆類は看る中に蛇か出るか蟒が出るか問題である『春城隨筆』の如き其の内容に於ては全く最初から見當が付かぬそこに又云ふに云はれぬ興奮感を感んならしむるのである

◆著作者が斷片的に書いたものを掻き集めたり新聞雜誌に連載した雜錄類を單行本としたもの是等を總括して隨筆と云へぬでもないが一貫したる隨筆氣分に乏しい謂はゞ端を掻き集めて店に陳列したもの様なものである價値の有る品の棚さらへである勿論其の中には意外な逸品の掘出しもあるが一歩々々佳境に入る執着が無い

◆『春城隨筆』と云はず『隨筆』と云はず『春城隨筆』と云はずに『隨筆』類の博覽强記に驚く、ひるがへつて『春城隨筆』は趣味の豐富なるに驚歎する仁義禮智無情何んでもかでも趣味律に入らないものは之を一串したる興味津々たる所は全く翁一流の筆に非ずんば他の能くする所でない、シルクハットを冠り下駄を穿いたような獨酒落は隨筆の大禁物である

◆春城翁の筆は一ユーモアに富んで居るしかも輕いユーモアである調共に露骨だけ夫れだけ滑稽、桂派の落語の聞くに耐へぬも夫れである信州の人間は頑かで蕊くならねば鮪を喰つたような顔持がせぬと云ふ夫れが鮪の眞味だと解釋される夫れは助からぬ輕いユーモラスト夫れが上乘である

◆世間並の隨筆は博識者の筆である形而上下有りとあらゆるものを引つ張り出して羅列する何人も其の博覽强記に驚く、ひるがへつて『春城隨筆』は趣味の豐富なるに驚歎する仁義禮智無情何んでもかでも趣味律に入らないものは夫れが決して奇强附會でない極い夫れが決して盡きぬのである

◆趣味は捕ふべくして習ふべきでない、春城翁は徹頭徹尾趣味の人である何う見てもヤタラ縞い丹前に長火鉢といふ風貌で粹ッぽい所に筆を廻しあつさりと方付いて行く所、茶屋の手前、客の心得、凝つて〳〵凝り抜いた所を見せて微塵も動かぬ所例へ翁の趣味は無くして〳〵趣味に圓融せらるゝのである安詩多謂

圖書館の壁畫

圖書館長　林　癸未夫

二昨年十月に落成した我學園の新圖書館の階下ホールの突當り正面の壁に、直徑十五尺の大圓形が、黑塗の椽の中に、眞白く塗られたまゝになつてゐたので、見る人毎に「一體これは何のためだ」と不審がられたものだが、實はそれが壁畫をはめこむ計畫によつてできたものであることは、更めて說明するまでもなく、今では誰も知つてをることである。しかし此壁畫は、是非とも我學園の精華と新圖書館の使命とを象徵するに足るほどの

一　大名畫

でなくてはならぬといふのが、最初から學園當局の希望であつたので、此計畫を傳へきいて、間接直接に執筆を願つて來た畫家も二三にとゞまらなかつたけれども、容易にそれに應ずるわけには行かないのであつた。ところが昨年の春頃、高田總長が、かねてから交友淺からぬ

大觀、觀山兩畫伯

と同席された折、右の計畫を話されて「どうだ一つ巨君で引受けてもらへまいか」と切り出されたところ、案じをより生むが易いとは此事で、兩畫伯は「よろしい、一つやつて見よう」と快く承諾してくれられたのであつた。言ふまでもなく此兩畫伯は、現代日本畫界に於ける大立物であるばかりでなく、我國の美術史上に不朽の名を殘すべき稀代の大家であることに、誰も異論はないのだから、此兩畫伯によつて此壁畫が描かれるといふことは、まことに望外の幸として、吾々一同大に滿足したのであつた。でまづ執筆者は首尾好くきまつたが、次は

畫　題

だ。何を描くべきやの問題だ。久遠の理想と現實の知德、それは建學の本旨である。學術の研磨と文化の開發、これは圖書館の使命である。加ふるに莊重簡素を基調とする篇

振はれる設備をした。それから又彩色用の金泥約千五百圓を京都から取寄せ、墨は支那乾隆皇帝時代の祕傳製法に成つた、一本千圓もするのを惜し氣もなく擦り流すといふやうな次第で、準備萬般を調へ、いよ〳〵十二月二十四日に、兩畫伯は勿論、總長初め學園關係者十數名、美術院に參集し、筆始を行めつたのであつた。

すであらうと想像されるばかりでなく、東京に新しい一名所を加へたことにもなり、又將來恐らくは

國　寶

たる名譽をもつに至るであらうと期待しても、まちがひはあるまいと考へる。よつて此顚末を玆に記し、校友諸君と共に喜びを頒ちたいと思ふのである。(一月十八日稿)

の建築樣式との調和も考へなければならぬ。そこで、あれがよからう。これも面白い、といろ〳〵下馬評はあつたのだが、しかし何よりもまづ執筆者の說を聽くのが順序だといふことになつて、昨年の四月二十八日、兩畫伯を招待し館の內外、殊に壁畫の位置をよく見てもらつた後、大隈會館に關係者一同寄集つて、さて畫題の相談といふ段取りになつたのだが、これが一人でなく、兩畫伯の合作であるだけに、畫だむづかしい。なか〳〵名案が浮ばない。そこで其場は決定に至らなかつたが、其後大觀畫伯が、いろ〳〵考へてくれられた結果、これは何うだといふ提案があつて觀山畫伯も同意、學園側でも贊成して、いよ〳〵きまつたのが

『明　暗』

である。これは成程「名案」だといつても、知らぬ人にはわかるまいが、まづ直徑十五尺の正圓形の眞中から下に、大觀畫伯が得意の水墨によつて、漠々たる黑雲をかき、其上に觀山畫伯が、金泥を以て半ば現はれたる日の出をかゝうといふのである。其意味は要するに、大學及圖書館の意義に鑑みて、文化と野蠻、理智と蒙昧とを對照し、あはせて我學園の隆々たる發展を象徵するにあるのである。

そこで畫題もきまつた。後は唯完成の早きを望むばかりとなつた。ところが玆に意外の大問題となつたのが

用　紙

である。絹地は耐久力が乏しいから駄目、是非とも紙でなくてはならぬといふことは、最初からきまつてゐたのだが元來一枚でこんな大きな紙のありやう筈はないから、幾枚かにかいて、後で繼ぎ合せるといふ豫定であつた。ところが何うもそれでは繼ぎ目がうまく行くまいといふことになつて、大觀畫伯がかねて懇意の製紙家、福井縣今立郡岡本村の

岩野平三郎氏

に照會されて、三間四方の紙を造つてもらへまいかと言つてやられたところ、岩野氏も此註文には大に驚いたが、ともかく一つ工夫して見ませうといふことになつた。さあそれからの岩野氏の苦心慘憺は大變なものだつた。九尺や十二尺の紙をすいた例は稀にはあるさうだが、何にしろ十八尺四方の紙といふものは、まさしく前代未聞で、流石製紙界に其人ありと知られたる岩野氏も、一時は兜を脫がうかと思はれたさうだが、しかし名人肌の氏は、何とかして此空前の事業に成功して見たいと、岡太神社（製紙の神樣）に祈願をこめ、幾日かの間は、寢食を忘れて、工夫に工夫を凝らした揚句、終に其目的を達したのであつた。もつとも其間には幾度か失敗を重ね、又奇談珍聞に屬する事柄も少くないのだが、それ等は現場を見ない素人には、鳥渡想像のできぬことだから、略すとして、とにかく此紙をすくために新造したコンクリートの枠が三千五百圓を要し、原料は楮五分、雁皮三分、稽二分といふ未だ日本紙に試みられたことのない新しい配合で、紙質の優秀なること、恰か

も鹿皮の如く、萬代を經ても變るまいといふ氏の保證である。その又重量が一枚三貫目で、これを十枚東京へ送るのに、十五噸の貨車を以てする始末であつた。そこで運送屋も紙とは思はず、幾日か露天に曝しておいたといふ迷惑な逸話もあるが、しかし中味に損傷のなかつたのは何よりだつた。これは今年になつてからの話だが、岩野氏が此紙に何か新しい名をつけてもらひたいといふので、學園關係者いろ〳〵首を捻つた結果

岡　大　紙

がよからうといふことになつた。岡は岡本村と岡太神社に因み、大は大學、大隈、大觀等に緣があるので、それにきまつたのである。

そこでいよ〳〵兩畫伯が揮毫に着手される段取となつたが、何にしろ三間四方といふ用紙のことだから、これに塗るドウサ五升を要し、これを乾かすためには日本美術院の庭前に足場をかけて、紙を乘らすといふやうな騷ぎである。それから畫室には特に兩側にレールを設け、其上に厚い板を滑走するやうに取りつけ、畫伯は其上に乘つて筆を振はれる設備をした。それから又彩色用の金泥約千五百圓を京都から取寄せ、墨は支那乾隆皇帝時代の祕傳製法に成つた、一本千圓もするのを惜し氣もなく擦り流すといふやうな次第で、準備萬般を調へ、いよ〳〵十二月二十四日に、兩畫伯は勿論、總長初め學園關係者十數名、美術院に參集し、筆始を行めつたのであつた。

やがて諒闇となつたが、それでも畫伯は筆を捨てずに仕事をつゞけてくれられたので、思ひの外にはかどり、本年一月十日頃には、さしもに大きい畫面も、神祕的な濃墨と燦然たる金色とによつて大半蔽はれるに至つた。折しも好く、製紙家岩野氏が上京されたので、一月十二日午後二時都下の新聞記者を美術院に招集し、學園からも多數參列して

披　露　會

を催した。まづ田中理事が起つて此壁畫の由來や畫題等について概略說明せられ、ついで岩野氏が製紙の苦心談を述べられ、あとは撮影で、フラッシュライトが盛に賑やかな音を立てた。此記事が翌朝の新聞に光彩を與へたことは言ふまでもあるまい。かくて此壁畫の出來上りは一月下旬の見込であるが、これを貼りつける館の壁面が、もとカーヴになつてをつたのを、平面に直さなければならぬので、その仕事の竣工をまつて、こゝに掲げられる豫定である。いよ〳〵完成の上は、又とない校寶として參觀者の驚眼をかすであらうと想像されるばかりでなく、東京に新しい一名所を加へたことにもなり、又將來恐らくは

國　寶

たる名譽をもつに至るであらうと期待しても、まちがひはあるまいと考へる。よつて此顚末を玆に記し、校友諸君と共に喜びを頒ちたいと思ふのである。（一月十八日稿）

十二行

十二行

第二の親

——男爵　古河虎之助氏談——

昆田氏が私の家に來られたのは明治廿八九年頃のことゝ聞いて居ます。これは亡父が非常に信頼した辯護士岡山兼吉先生の許に昆田氏が居られた關係からなので、明治卅年に足尾鑛毒問題が勃發した爲め、其歳から正式に私の家の仕事に携はられる事になつたので、法律を專修した人で古河に來られたのは昆田氏が最初なのであります。當時私は十一歳の子供でしたから、勿論、事業に關して殆ど記憶はありませんが、昆田氏の勤務された歳に、帳場格子前垂掛けで商賣をして居た日本橋瀧戸物町の店から丸の内に移轉して、古河鑛業事務所が新設され、昆田氏は庶務課長となつたのです。爾來、昆田氏は一時も本社を離るゝ事がなく、父を輔け兄を佐けてくれたので、明治卅九年、私が事業を繼承しましたが、大正十年に昆田氏に合名會社理事長として事業全般を見て戴くことにして今日に至つたのです。

私の幼年時代より、家を相續しまする迄の間、私を指導誘掖して下さつた諸先輩や家の宿老に對しては、今に感謝することを忘れません。私が親しく事業を見るやうになつた後、社業に關する事は勿論、一家一身上の問題に就てまでも眞味の相談相手となつてくれたのは昆田氏であります。私が特に同氏に多とする處は、斯かる問題の度毎に忌憚のない賛否の意見を加へてくれるばかりでなく、その意見の實現を容易にする爲めには、到底餘人には見られぬ誠心誠意を以て、目立たぬ努力を續けてくれた事であります。世の中には、提案者忠告者は尠きを恨みとしません

か、提案と同時に其實現迄努力を續けてくれる熱意の人は甚だ乏しいやうに思ひます。併し、昆田氏の如きは、私をしてその乏しきを憂へしめなかつた唯一人であつたと云ひ得ませう。この點に於て昆田氏の病歿は、私にとつて何時迄も消えぬ悲しみであり、癒えざる痛手なのであります。

昆田氏の性格性行に就て叙べたいのですが、餘りに親しく、餘りに永く同氏を識つて居る爲め、私としては自分自身の行歴をお話し難いやうに、取り立てゝお話する事が出來ませず、又、只今としては、同氏の過去を追憶する丈けの餘裕を持つて居りません。

私は明治卅六年に父と別れ、卅八年に兄を喪ひましたが、今、昆田氏の急逝に遭つて、實に第二の親を喪つた心地がします。第二の親を喪つたといふ言葉が昆田氏を弔ふ私の心からの言葉なのであります。

昆田君を悼む

名譽理事　市島謙吉

私は昆田君の爲めに追悼の文を草するやうなことがあらうとは夢にも思はなかつた君は昨年十一月の末頃から、心經痛で困ると、時々語られたが、實はかりそめの病氣とのみ思ふてゐた。十二月の初め頃君は私を訪はれて、兼て吾々が委員となつてゐる學校の會計規定につき、いろ〳〵話があり、其翌日であつたか、學校の維持員會で一年越し懸案であつた、此の規定を初めて評決した時、昆田君も列席されたが、君と語を交へた最後は此時であつた。其後學校は吾等委員の爲め特に慰勞會を開かれたが、君は病床に在つて來會が出來なかつた。併し自分は左ほどの重患と思はず、展墓の爲め郷里へ歸省したりして、見舞を怠つてゐたが暮の三十日に君は尚引つゞき病床にあると聞いて、大晦日に訪れて見て、始めて重患であることが分つていたく驚ろいた。それから明けて一月二日に入院されてからは面會も叶はず、臨終頃に一兩度病床に近づいたが、勿論語を交ゆることも出來ず、空しく斷腸するのみであつた。そして君は終に長逝した。

私は君と郷國を同ふし、明治四年新潟で君が母校の爲めに幾回か多くの資を寄せて其事業を助けたことは隱れもない事であるが、或は郷黨の爲め或は友人の爲め人知れず投じた資財は算し來れば驚ろくに足るほどの巨額に上つてゐるだらう。君は己れの爲めに財を散するのは寧ろ吝であるかのやうに思はれたが義の爲めに投ずるとなると實に大膽であつた。君は頗る世話好で君の爲めに地位を得たものは少なくない、君夫婦の媒妁で結婚したものなども實に多數ある。如斯き人事も君は趣味をもつて熱心に斡旋したらしく思はれる。

君は古河家に仕へて三十年一日の如く努力し終に總理となつたけれども、君は久しく課長の地位にあつた、君は決して自ら地位を昇せることに内々運動したり焦つたりする人でなかつたからの事だ、局外から見て餘りに立身が遲いと、吾々が暗に氣をもまで起らなかつたけれども同感の誼がある

それから十年を隔てゝ君は東京專門學校に學んだから校友の好みもある、君は卒業後私の親友岡山兼吉氏の下に辯護事務を執り岡山氏を師と仰いだので、君と私との關係は一層深くなつた。岡山氏が歿して君は古河家の人となつてから三十年の久しき、君は例として幾んど毎日曙私を訪はれた。早稲田大學の紛擾後君が維持員に擧げられてからは、一層往來が頻繁となり、重要の校務を君と打合たことが少くなかつた。公私の事に君が私を助け私が君を助けたことも決して少なくない、君と私とは兄弟當ならざる情誼がある、君は私の亡弟と同齢で私より二歳若かつたのに、私に先だつて逝くとは、世は眞に塞翁の馬で、何たる番狂せであらう。

私は君に就て語るべき多くを有たぬではない、併し今はそれを語るの邊がない。こゝには聊か君の性行に就て語るに止めたい君は實に不思議な性格の持主であつた。今の世の中には多く例の無い珍らしい性格の人であつた。君は内實剛健の資に富んでゐたが、多くの人がそれを知らぬ程自から韜晦して謙抑をつとめた。君はどんな事でも人と爭はなかつた。君は勤勉努力の人であつたが、決して事功を急がなかつた。君は常に功を人に讓つてみづからは素知らぬ顔をしてゐる人であつた。君は自から事をなし終つても決してそれを吹聽する人で無つた。君が人の窮を救つた事は實に少なくないが、當事者の外には誰れも知るものが無い位吹聽を忌んだ。君は事に當つていくら困難しても其の苦みを云ふたことは無かつた。君の辛抱强さは名高い者で大抵の人が匙を投げる場合でも決して投げなかつた、如何なる場合でも忍耐して事を遂げるまでは辛抱した、君の氣根には何人も打勝つことが出來ず、終局の勝利は君に歸した。君は事の成る迄は何十日かゝらうが何月かゝらうが孜々として倦まず努力を續けた。局外者からは往々無益の勞と見らるゝ事もあつたが、實は成功の道程に於て大切な努力であつたことが後に至つて何人も理解した。君は頗る苦勞人で、人事に就ては何事も知り拔いてゐた、それでゐて功を急がず爭ふべきをも爭はず、幾度も自から足を運んで氣根よく淳々として訓くから、どんな紛糾したことでも終には解けた。如何なる强硬の對手も君の氣根と君の爭はない態度には負けざるを得なかつた。君が大小の調停に功を奏したことが少なくないが、實は君の特有の性格が然らしめたのである。君は嘗つて自分に言つたことがある。如何なる困難な事でも人に關係することならば理し難いことは無いと。君は確かに人事の紛糾を理するを以て、それを厄介視せず、寧ろそれを興あることゝしたらしく思はれる。全體君は書畫や骨董や飲食や衣服其他に趣味を有つてゐなかつたが、唯だ人事に就てのみ趣味があつた。そしてこれが事業家として最も大切な趣味であつた。君は何れかといふと寡默の人であつた、人を訪ふても自から語ることが少なく、人の語るを聞く方が多かつた。人の語るを聽くことが君の趣味であつたやうにも思はれる、君の兵法は自ら議論して人を屈服せしむるでなく、人をして語るに落ちしむる方であつた。寡默の人の利益は人の言説を收得するにある、そして兎もすると乘ずべき隙を攫み得る。此兵法は君が其師たる岡山氏から得たものだと自分は信じてゐる。君ほど岡山氏の性格をよく學び得たものは無いと思ふてゐる君は決してみづからの能を頼むことをせなかつた。君は友人其他配下の人の長所を適當に用いて自から爲すべきことを代辨せしむるを例とした。こゝらも君の大きい處である。君は亦自から奉ずることむ甚だ淡かつた、君が震災前に住した宅などは敢て美宅では無つた、君の不如意の時代に古河翁から買つてもらつたのだといふて滿足してゐた。それが震火に亡び、茅ヶ崎に在つた別莊も共に潰れた、併し君はそれ等を復舊する力がありながら、一向に構はず、借家住居で遂に終つた。君の道樂は義の爲めに財を投ずるに在つたと云ふてよからう、

み、昆君を古河家から拔いてきて、早稻田關係の銀行を經營してはとの計畫もあつたが私なり君に此事を談した時が丁度君が理事に昇任と內定した時であつたので、計畫はそれで止んだことがある。君が古河家に如何に奉仕したかの如きは茲に言ふべきことではないが、夫の鑛毒事件に就て若くは古河家の授爵問題に付て、如何に君が赤誠を以て事に當つたかは、私が關係したことであるからよく知つてゐるが眞に敬服の外無つた。これを以つて推せば他もおよそ想像が出來るのである。君は早稻田の紛擾を處するに如何に性根を盡したかは同人の齊しく知る處で、君が母校に重きをなしたのは決して偶然でない。君は何事を爲すにも前置を推して前頭に立て自からは背後に事實の仕事をしたから、其功が多く現はれないけれども、君の尊むべき性格はこゝに在るのだ、心あるものの誰れか君の隱れた功績を思はざるものがあらうぞ。君が六十六年の生涯に一人の敵のないのは珍らしい例であるが、これなども一つは君が功を人に讓つてゐるからであらう、併し實に出來難いことである。

君の長逝は早稻田の大損害であると共に古河家の損害である、經濟の損害友人の損害であるは申す迄もなく、實業界の損害であると云はねばならぬ、今の世には智慧の人は多く出るが、君の如き德の人は容易に出ない、近來惜むべき友人を多く失ふて痛惜に堪へないが、昆田君とは長い交りで、兄弟同樣の情誼もあるから、別して痛恨を禁じ得ないのである。

高潔な人格者

——三菱鑛業會社重役　三谷一二氏談——

昆田君の生前の逸話について御尋れであるが君とは比較的晩年の交際であつたので其の學生乃至壯年時代の事については多くを知らない、然し此の十年來は公私共至つて親密なる間柄であつた。

氏は性質極めて恬淡、名利に疎く稀に見る人格の士で、又事業界のみならず、教育界にも多大の貢獻をなし後進者の誘掖に努めたことも世上周知のことである、其の人格の力、人格の光として殊に記憶に新なる一事は曾て大正十年頃、內地金屬鑛業界特に銅鑛業が極度に悲況に陷つて將に破滅に瀕した當時、氏は一身を擲して之が救濟に努力し、銅關稅の引上に奔走したのであつた、氏は早稻田出身（東京專門學校）であつて言論界にも知人が多く、其の人柄について知らぬ者は無かつたので時の政府、與黨も之を贊し在野黨に於ても其必要を認め終に確か大正十一年三月の法律であつたと思ふが銅關稅の改正を發表することになつたのである、關稅引上による鑛業保護の如きは、鑛業が多くは富豪の事業に屬する點に於て單に之等少數の資本家の爲めに圖るものであるとの一般の誤解を招き易いものであるが氏は國家產業上の重大問題であるとて國を憂ふるの一心から極力之を主張した其至誠が一般に認められて此の危機を救ふことが出來たのである。

之は一に氏の賜であつて他の何人もよく之を成すことは出來なかつたのであらうと確信する。

又私は氏に接して未だ曾つて一度も不快を感じたり其の怒つた顏を見たことが無い常に溫容自若實に人格高潔の光輝として最も畏敬して居たので其の訃は實に[illegible]も餘りある所である。

○豊陵寺未定稿ヲ支那游学ヲ書セラル前年余カ朝鮮ヲ経テ燕京ニ入リ[illegible]
[illegible]ニ寄リ進路[illegible]ヲ選ム[illegible]
爰ニ収メテ、豊陵寺ヲ徒等ニ示カ[illegible]
ニ[illegible]官吏[illegible]ヲ、亡友五岸論ヲ
以テ星陵ト交[illegible]ル[illegible]余ハ亦[illegible]ル、五岸歿
シテ後時ト往復[illegible]、星陵モ
二年[illegible]余モ亦[illegible]ヲ歿ス
ルヲ聞キ毎ニ其ノ[illegible]ヲ歎ス
ルヲ常トス、

二月十六日記

十二行

北支游艸

豐陵青木定謙甫藁

大正丙寅坤月初六發京同臺月初一歸京

發京口號次雄水將軍送別韻

欲訪燕山落木秋西風萬里又優游奎翁聞道在前路老後吟懷似我不　奎堂前首相先我游禹域

又次石舟翁送別韻

昨上南游今北游片帆長嘯海門秋滿頭白髮梳風去欲蹈殊邦四百州

宿女婿弘毅家

樓閣三面千風清珂水玻山貴紫明樓亦名明紫　秋語豈唯盡情緒秋霖一掃遇新晴　昨秋女病今年痊

玄海

一碧秋晴玄海明長風破浪片帆輕曾留鴻爪周韓滿七十重爲萬里程

朝鮮多嶋海

起伏亂山連北方南天極目水蒼茫巨文在左濟州右君羊嶋三千迎送忙

望韓山憶孫道一

韓山聳北勢嵯峨君羊嶋布碁形勝多遥憶平安孫道

也紙鳶竹馬近如何

過黄海

臨風弔古夕陽曛黄海波高憶偉勲身坐朽艣擒二
遠撫將軍是鬼將軍

近望威海衛

天險依然勃海横龍驤虎搏尚留名高風長仰丁提
督一將亡身萬卒生

山東岬角望田横島

獨全高節遁東海屈膝豈遺丈夫悔殉死義徒五百
人長教士氣振千載

遥望旅順

遥青一髪映長天白玉黄金何處邉牢記血河屍壘
跡曽游回首十餘年

湖白河

海日輝々映絳波輕帆片々聽漁歌老而益壯吾何
者黄髪梳風上白河

天津宿三男六郎官廨

一別三年夢屢回天涯相見老顔開歡談尤喜三孫
長承也呼爺上膝来

天津

北洋萬里接長空直隸咽喉此處通民國新興民却
苦李公祠畔憶英雄
翠閣朱樓臨白河金城無跡感偏多法英租界壯觀
甚奈我經營遜色何

燕京

黃甍燦爛映金門玉闕猶看萬乘尊休道前朝王氣
紫禁城
滅乾隆化錄石經存
倪鈹徐彩筆明麗周鼎漢鍾罍碧蒼宇內寶珍盈玉
文華殿武英殿
殿于今清室有餘光
德齊日月古今明道合乾坤仰大成洙泗淵源流不
盡笞碑長淫牧元名 碑錄元朝以後進士名
湖天浮玉築樓臺瓊島風暄畫舫回驕樂場中留舊
恨景山遥映碧波來 北海、瓊島、景山明亡
崇禎帝縊
題湖天浮玉四字
喜捨靈塲另闢天世宗遺畧永堪傳喇嘛修教僧三
百叩頭三跪化佛前 雍和宮一喇嘛廟

萬壽山

金碧燦然輝帝州排雲更見佛香浮 佛香閣在排雲殿上玉階
梯寸上百餘級山色湖光共一樓 第四用題廻廊之句
層雲飛閣聳朝天湖上彩樓浮石舫儼仰遺容賢太

石齋簾聽政卅餘年

臨去題燕山崖壁

寂莫燕山霜隕初西風来弔舊王居欲知文物當年盛石閣猶存四庫書

新興民國革新初億兆于今泣索居百歲屢聞賢相出救荒誰敵活民書　宋董煟有救荒活民著

十三陵

古柏老松猶鬱蒼十三陵域委荒涼石人不語秋風颯憑弔停節立夕陽

萬里長城

羣山重疊勢崢嶸天險居然自帝京笑殺祖龍懦怯甚驚風駛雨築長城

天津草刈詩盟招飲

詩酒天涯也勝緣金尊浮綠酌如泉醉餘展畫頻牽感偶誦倉翁長短篇　文晁青綠山水冊底讀故倉翁題詩翁主人岳父而爲我先輩

舊邦

前財政總長張弧岱杉雅招

前朝冠佩仰儀容一代經綸百代宗餘緒丹青縱清鑑雲煙縹緲滿堂濃　主人藏今古妙蹟爲余展觀之

同盟賓主眼共青舊國文章仰典型此座豈唯話風同雄談慷慨及生靈

別兒六郎

父子聯車舊帝畿壯游如此世間稀竊欣令聞傳殊域期汝陽春晝錦歸

山海關

遼左要衝萬仞山霸權爭奪在斯間飆車載夢文明澤臥過長城第一關　匾題天下第一關

知道官邸水月樓矚目

萬里江山收一樓千家粉壁入雙眸桑滄幾變興亡夢襟帶依然舊國秋　邸在平壤瑞氣山頭

江樓雅會　秋頭流

長男戒三爲平安太守爲我招鷄林老儒于大同江畔長春樓探題勒字賦詩

夕陽紅對錦峯牡丹臺一名錦峯秋對映慙吾白盡頭滿座詩豪追李杜詞源滾々倒長流

正是韓山錦繡秋崇樓聳在大江頭風吹霜鬢縱長嘯不落人間第二流

醉後又得一絶

佳人扶醉興頻催簾唱妍酬玉盃月畫蘭竹村菊山月竹村官妓名寒香素影泛杯來

浮碧樓矚目

碧水洋々萬里流煙波縹渺欲浮樓雙臺逼處舟屋
峙綾島霜楓蜀錦秋

樂浪鶴陣

萬里靈禽回海東縞衣數陣舞蒼穹聲々似弔興亡
跡漢代餘音樂浪風

臨別與嫡孫道一

又爲兒孫迂路来欲看道也笑顔開垂髫能解正用
字卜道他年杞梓材

歸途

吟過明月碧雲秋歳々同時試勝游漢水燕山幾迎
送徧收囊底上歸舟

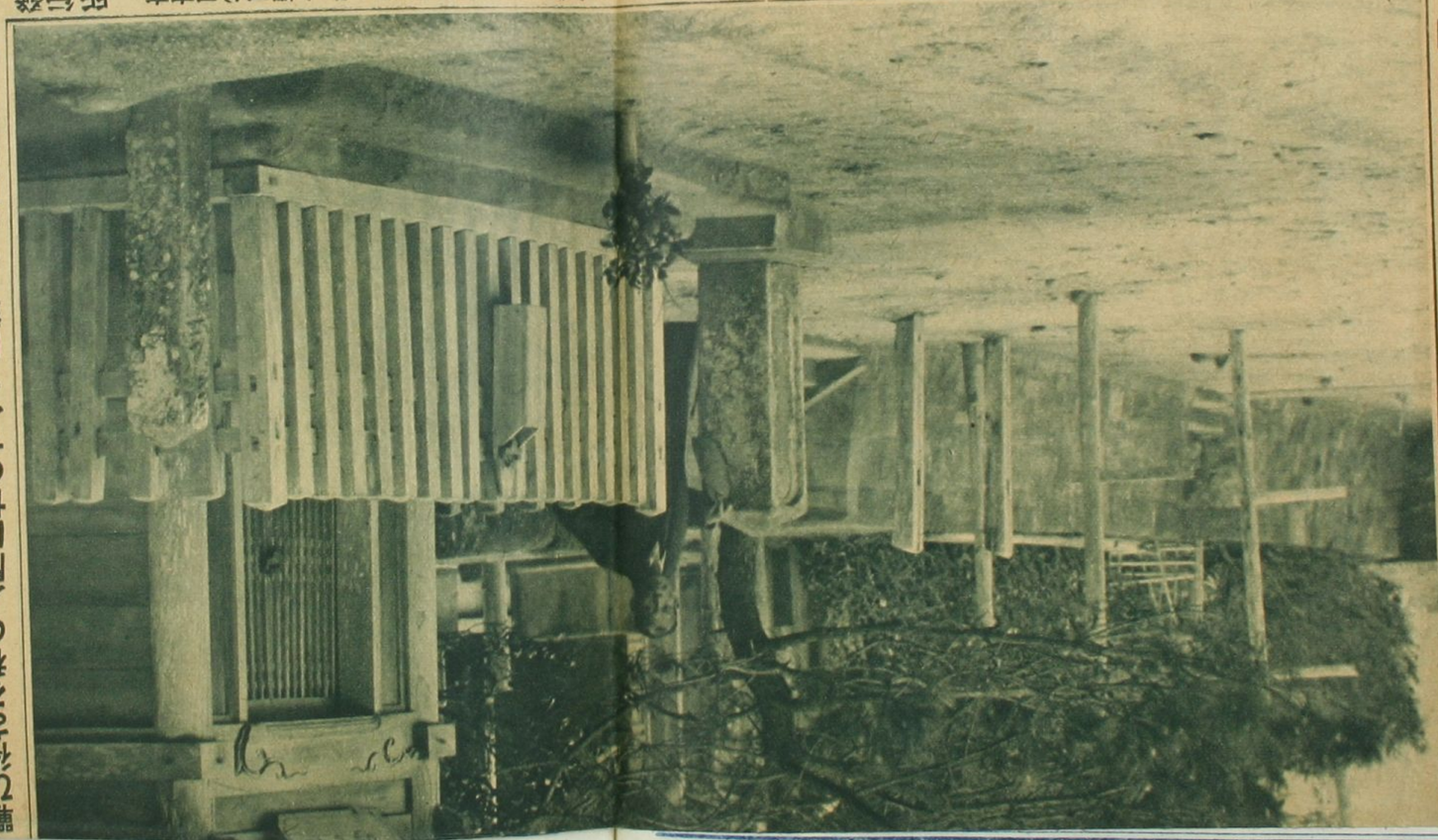
春城先生大次

十二行

（第三種郵便物認可　昭和四十五年三月六日）　昭和二年二月六日　天業民報　（日刊）　第一千八百九十八號　（閑子主以東京朝報三一六九八號）（十九）

二月十五日の朝日とめ大聖釋尊はすが、水戸といひ、精

番三九九三五京東替振　〇九〇一―〇〇九一（振替貯金）　社報民業天　（谷鶴）地番一町木櫻區谷下京東　所行發



戰ひ得たる程の人間は世のすべてに對して敗者なり口

真ならして個人の情誼も整ひ社會の秩序も立つ次第

日蓮聖人靈蹟

□火事に遭はゞ逃げるよりも荷をかたづけるよりも先づ其火を消すべし火に對して

二月十五日

第三九九二

□まつしぐらに個人の情誼を捨て社會の秩序を立つ

心越禪師の佛涅槃圖

（身延山久遠寺藏）

一月十五日の朝日とめぐつて來ました、本佛、釋尊入滅の日であります、一月十六日は日本國土、すべてはただ妙なる一大事因緣において日蓮聖人生誕の日であります。天然の夕日は日本の聖日、釋尊は二月十五日を以て不滅の滅を示されました、これを涅槃といひ、水戸光圀公が亡母の日を以て菩提供養のため心越を招かし身延へ納めたものです。佛涅槃圖一幅、これは心越禪師の筆であり、越禪師といひ、精神といひ、由緒といひ、稀代な名品であります。

菊花御紋章 純金 教育勅語縮圖

竪一尺五分 幅八寸五分 二枚 正價金二圓
一枚 正價金一圓

各送料金十八錢

右は表鳥の子紙にして、厚張り大色紙形、四方金縁取り。

賜帝國在鄉軍人勅語縮圖

右 三枚一組 正價二圓 送料十八錢

右は各位の好みに依り隨意に額或は掛軸仕立に成すに便利の爲に鳥の子紙に押したる儘にして裏打ちせざるものなり。

誠。陸海軍軍人勅諭五ヶ條の精神

陸海軍軍人勅諭五大綱

シ、一ハ以テ子孫ヲシテ遵守スベキ方途ヲ謬ラザラシメンガ爲ニ、之ヲ壁間ニ謹掲シテ日夕拜誦シ、且ツ居室ヲシテ謹嚴ノ光采ヲ放タシメントス、庶幾クハ全國高風ノ士、進ンデ此擧ヲ翼賛セラレンコトヲ。

昭和二丁卯年二月

印影敕語普及會

賛助員

（五十音順）

陸軍中將 足立愛藏殿
參謀本部第一部長 陸軍少將 荒木貞夫殿
早稻田大學名譽理事 市島謙吉殿
帝國在鄉軍人會會長 陸軍大將 一戸兵衛殿
帝室博物館評議員 今泉雄作殿
樞密院顧問官 江木千之殿
宮中顧問官 海軍中將子爵 小笠原長生殿
文部省學校衛生課長 醫學博士 北豐吉殿
宮內省圖書寮囑託 橘井清五郎殿
皇典講究所理事 桑原芳樹殿
內閣兼內務省囑託 國府種德殿
文部省書記官長 澤田源一殿

帝國教育會長 文學博士 澤柳政太郎殿
第一高等學校長 杉敏介殿
陸軍參謀總長 陸軍大將 鈴木莊六殿
衆議院議員 高橋光威殿
國學院大學長 文學博士 芳賀矢一殿
陸軍少將 深谷又三郎殿
宮內省臨時帝室編修局御用掛 文學博士 本多辰次郎殿
東京高等師範學校長 文學博士 三宅米吉殿
二松學舍學長 山田準殿
東京高等學校長 湯原元一殿
文學博士 和田萬吉殿
東京帝大史料編纂官 文學博士 渡邊世祐殿

玄奘渡天之地圖

閲覧室

十二行